

397.21
A14
㊦



0057866000

0057866-000

397.21-A14ウ

武将夜話明日の海

安保清種・著

東水社

昭和18

AJG



397.21
A14
⑦

明日の海

阿狸著

505

武將夜話

39721

A14

(7)

明日の海



安保清種著

東水社版



忠不與出
國難清
清極教



清極教



筆自者著



著者の父安保清康中將

西郷南洲より越後方面出征中に父に宛てたる書簡(中)
坂本龍馬の横死三日前に父に宛てたる書簡(下)

西郷南洲様
越後方面に出征中にて父に宛てたる書簡の中
坂本龍馬の横死三日前に父に宛てたる書簡の下

別紙に父の遺書
西郷南洲の遺書
坂本龍馬の遺書

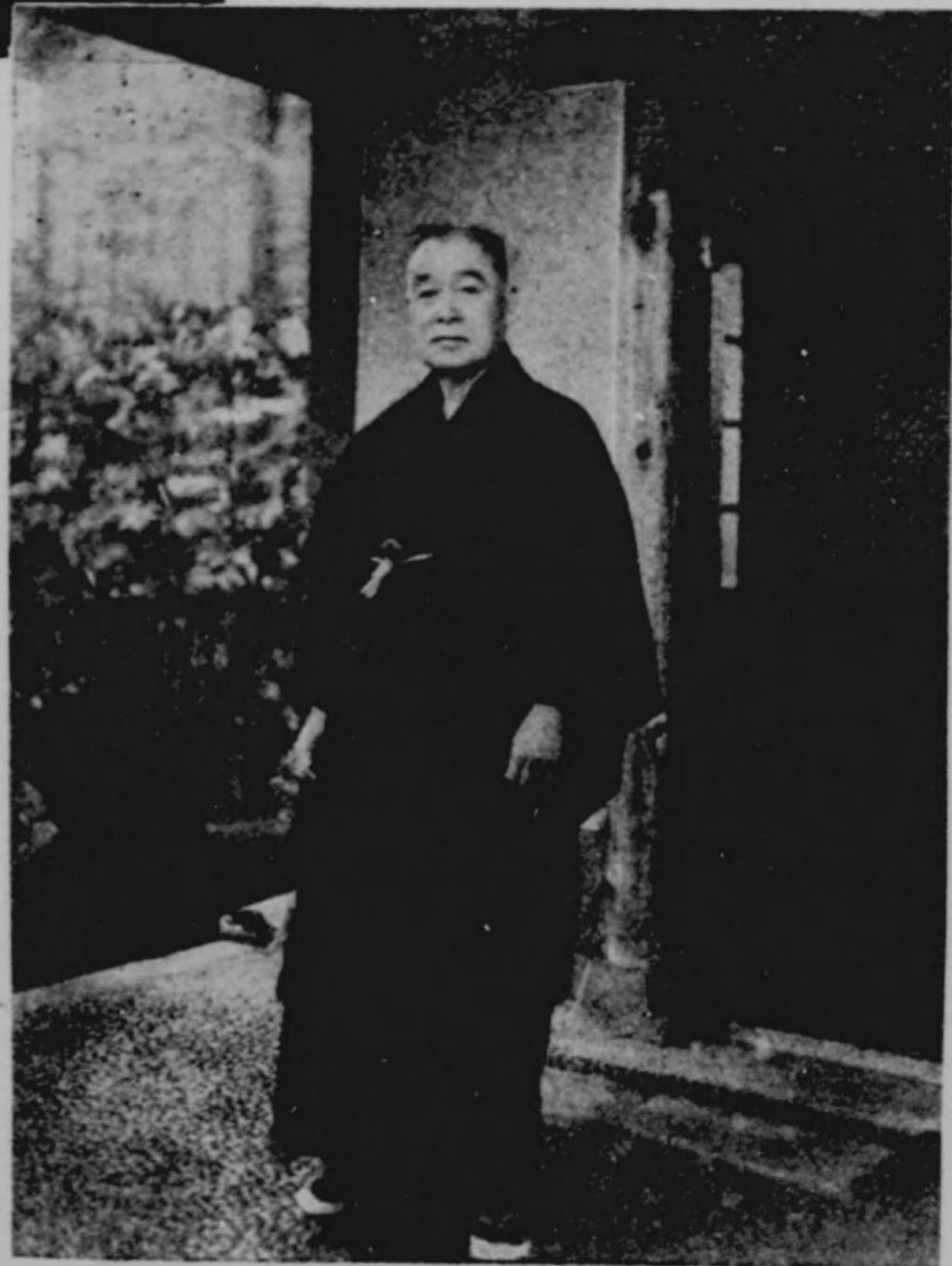


昭和九年夏著者が現役を退き貴族院議員となつて家庭に親しみし頃、夫人、長女及孫等と共に(上)

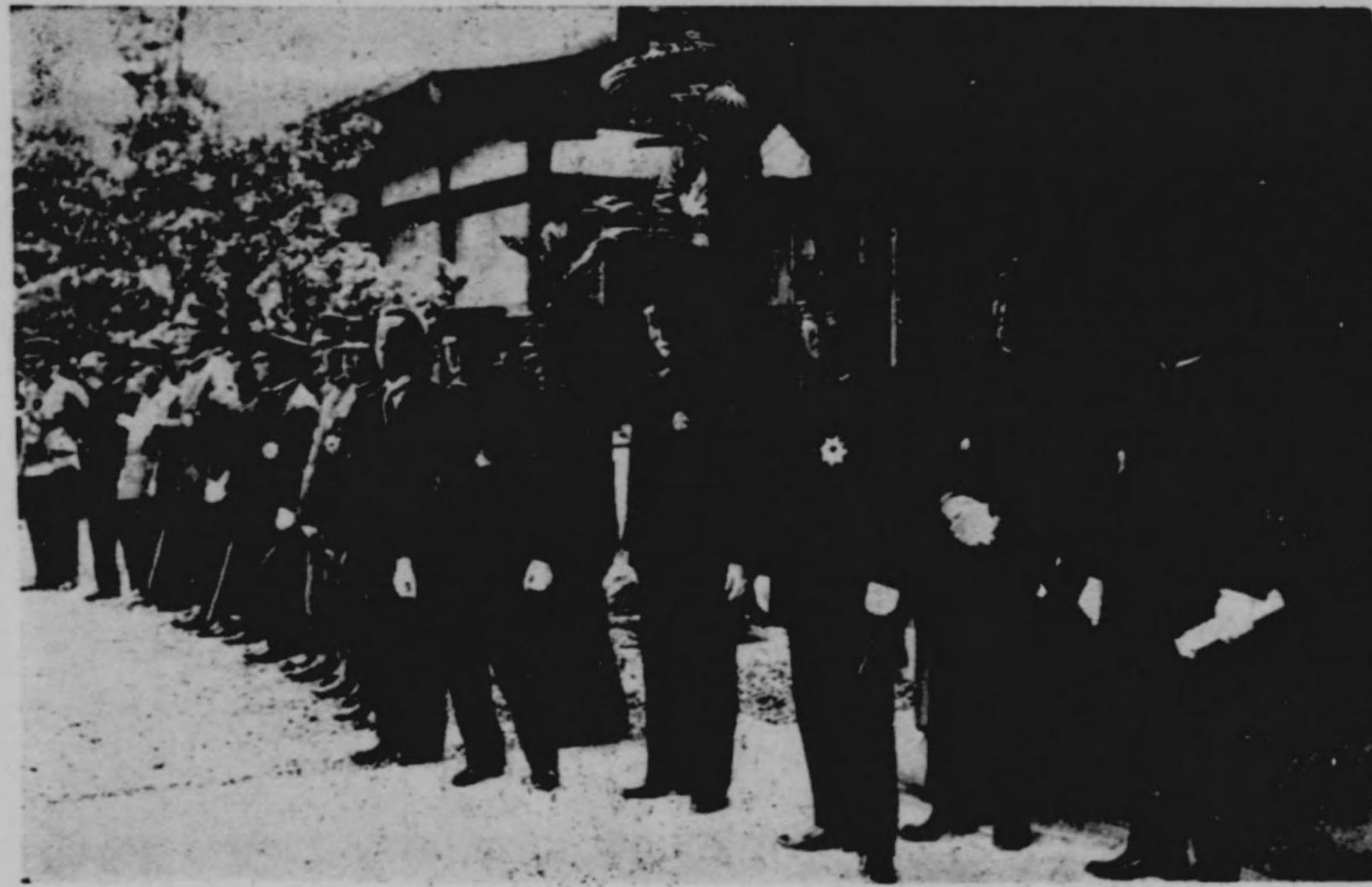
明治二十七八年日露戦役中著者の少佐時代(下)



大正二年著者の英國大使館付武官時代倫敦の自宅にて自寫したるもの



著者近影



昭和六年五月海軍記念日に水交社玄関前に 行幸奉迎の際、右より小林大將、永野大將、海軍大臣(著者)、山本伯、財部大將、東郷元帥、倉富樞密院議長、岡田大將、加藤寛治大將、一戸大將、尾野大將等



明治二十四年十月軍艦比叡がサイパン島北方にて遭遇せる大颶風の光景



大正十一年ジュネーブに於ける國際聯盟會議，向つて右のテーブル外側中央，本多熊太郎大使，其右著者（海軍代表），一人置いて長尾恒吉少將（陸軍代表）



大正六年秋海軍大演習統監部、前列右より中村良三中佐（後の大將）、著者（少將）及川古志郎少佐（後の大將）、島村速雄大將。後列右より三人目古賀峯一大尉（後の大將）、六人目山本五十六少佐（後の大將）



昭和五年六月高松宮殿下英國御訪問の際，バッキンガム宮殿内に於て記念撮影，殿下の向つて右著者，その右接待員シンクレヤ海軍大將，妃殿下の左ブレイスウエイト陸軍大將，その左落合御用掛



明治二十八年日清戦役に捕獲艦鎮遠を威海衛より本邦に廻航中。背面の點々は弾痕、前列右より三人目著者（少尉）、中列右より二人目航海長坂本一大尉（後の中將）、三人目艦長有馬新一大佐（故中將男爵）

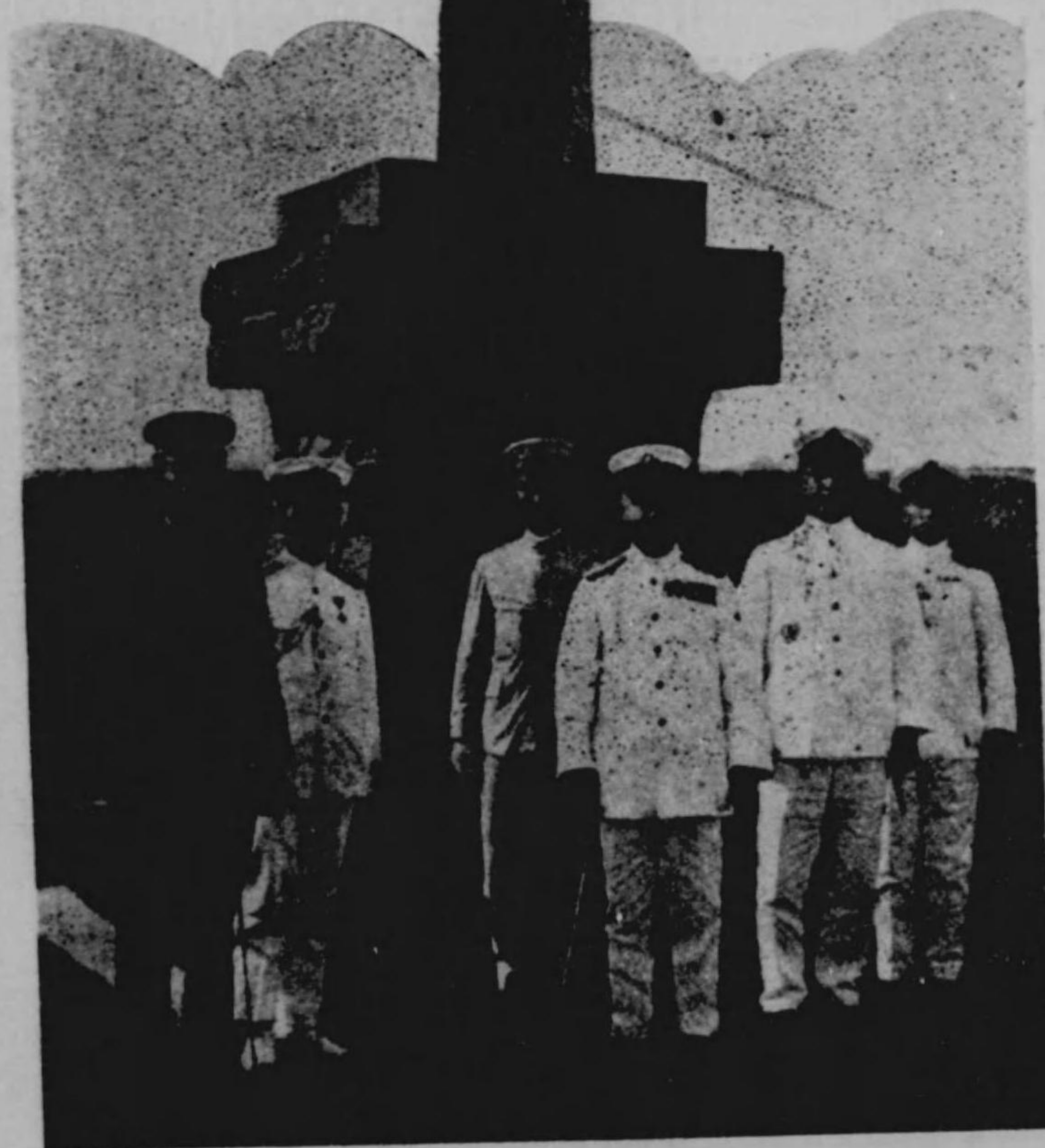
965
114

序

大御稜威の下、大東亞戰は其の第一段階に於て、實に赫々たる戦果を齎した。神國日本の民たる光榮に、一億の同胞は感喜感泣したのである。

が、これからは國民對國民、一人と一人との其の優劣努力精進が勝敗を決するのである。即ち眞の國家の總力戦である。此際敵を知り己を知ることが切要であり、濫故知新は自覺と勇猛心と徹底を明する根源である。

1
囑あるに任せ、そこはかきなく述べた。嘗つての經驗、所懐、印象、隨感は、やがて、昨日迄の海に關する批判となり敵國の意圖と氣質を



明治二十八年三月澎湖島攻略に續て獨力漁翁島を占領せる海軍速射砲隊、中央石に踞したるは左舟越掛四郎少尉（後の中將）、右著者（少尉）（上）
昭和七年夏澎湖島攻略上陸記念日と特命檢閱使（著者）（下）

傳へ、更に皇國聖將烈將の風貌をも偲びつゝ、將來の海への翹望想定となり一億國民の共に歩むべき熱願ともなつた。

題して『明日の海』と云ふ。蓋し日本の今日の出發に即ち日本の明日の行方を決定するのであり、やがて八紘爲宇の大御心の御恩澤、世界七つの海に光被すべきを確信して、盡忠報國を誓ふが故である。

昭和十七年十二月

清種記

明日の海 目次

序 文

口 繪 (寫眞)

題字——父安保清康中將——西郷南洲の書簡——坂本龍馬の書簡——退役後家族と親しむ著者——著者の少佐時代——昭和六年海軍記念日に行幸奉迎の諸將(水交社支關にて)——軍艦比叡颯風に遭遇——英國大使館付武官時代——著者近影——高松宮殿下御訪英の際パッキンガム宮殿内の記念撮影——日清役の鎮遠廻航——ジュネーヴ國際聯盟會議——大正六年秋海軍大演習統監部——漁翁島占領の海軍速射砲隊——澎湖島攻略上陸記念日と特命檢閱使

戦勝への途

上海事變の相貌	一
米英の焦慮と其戦備	四
チャーチル	四
歐洲方面の戦局	三

第一次大戦に於ける獨逸の潜水艦戦……………二四

米英の悩む船腹問題……………二七

國民の覺悟が勝敗の鍵……………二八

靖國社頭の櫻と百日紅……………三〇

海軍魂と葉隠精神……………三二

戦争に乗ずる米國の野望……………三三

太平洋海戦の様相……………三六

勝ち抜く途と「明日の海」……………三八

日本の母

日本民族の力の源泉……………三九

チャーチルの母とチャンパレンの母……………九九

ベトナム大將悲痛な告白……………一〇四

二代三代の忠臣は母の賜物……………一〇八

故人今人

小村壽太郎大使の眞骨頂……………一一

山本權兵衛大將と袁世凱……………二七

乃木大將のハイカラ姿と喧嘩……………二七

東條陸相寸鐵の一言……………三三

伊藤、山縣、大隈の特色……………三五

島村大將の情誼……………四〇

島村長官の決斷と研究心……………四四

泥の白服で伊帝と問答……………四八

シドニーで氣を吐いた山下源太郎將軍……………五一

ノックス國務卿の來朝……………五一

吉松司令長官の獨斷專行……………六一

英國の大宰相

老翁チャーチルと對談……………一三三

河豚喰つた報ひに喘ぐチャーチル……………一三九

政治家でないチャンバレン……………一八三

往年の英國艦隊

ベレスフォード大將とカスタン大將の話……………一八七

薩英戦争と英國艦隊の失敗……………一九一

美に懲りた英の備砲問題……………一九五

英艦上の競技悲喜劇……………一九七

英國艦隊の表裏

政争の餘波横須賀に及ぶ……………二〇二

發見した英海軍の不面目……………二〇六

士卒と寢食を共にせぬ英將……………二〇八

複雑なる英海軍の宗教行事……………二一四

大東亞戰と英國

傳統と國民性の軍備……………二二七

殉國の誠忠と白旗中心……………二三三

白人濠洲の昨今……………二二六

グリーンイツチと軍艦のペンデント……………二三〇

練習艦比叡の思ひ出

稀有の大颶風に遭遇……………二三四

四時會と呼ぶ蘇生會……………二四一

帆走中の壯觀錨釣……………二四六

見取圖と天測……………二五〇

黄海々戰に於ける比叡の奮戰……………二五三

日本の昨日と明日

日清戰役の三國干涉と帝國……………二六〇

日本に双向ふ國は皆亡ぶ……………二六六
一觸即發と飯沼飛行士……………二六九

亡き父を語る

隠れた父の慈愛……………二七三
南洲龍馬に海防を説く……………二七九
榎本武揚と海上に戦ふ……………二八四
大村益次郎の死を歎く……………二九四
佐賀の亂と鹿兒島の亂……………三〇〇
元老院議員から海軍省局長……………三〇三
父の晩年……………三七

装幀 川端 龍子 畫 伯

武將夜話

明日の海

戦勝への途

上海事變の相貌

大東亞戦争第二年目の昭和十七年は、恰も滿洲建國十週年に當り、九月十五日には、その記念式典が、新京と東京とで舉行せられた。大東亞共榮圈最初からの盟邦として、今日の隆々たる異常の發達に對しては、我國朝野の舉つて心からの祝福を捧げるところである。又同じ九月中旬には所謂同甘共苦の契り深い盟邦中華民國政府に、親善訪問使節の御差遣があり、男爵平沼麒一郎、有田前外務大臣、永井前拓務大臣の三大官が、特派大使として、賑々しく南京政府訪問の盛典を見たのであるが、更に、同月二十七日には、日獨伊三國條約締結二周年記念式典の舉行を見るが如き、何れも大東亞戦争で一入意義深きを覺ゆるのである。

今や、日獨伊三國の鐵の握手いよく堅く東西相呼應して、雄渾なる作戦は着

々として歴史に比類なき大戦果を挙げつゝあり、現に我が潜水艦は長驅して大西洋に侵入して、その鋭鋒を振ひ、米英の心膽を寒からしめ、獨逸の艦艇は亦、印度洋を股にかけて、敵の主要交通路を脅かし、三國の前途は光明に輝き、歩一步共同目的達成の階梯を進めつゝあるのである。

一體、滿洲事變と云ひ、支那事變と云ひ、何れも相關聯せる大東亞戦争の序幕演舞であるが、滿洲事變起るや、蔣介石は上海にある日本の兵力の寡少なるを見て、此の機會に一舉に之を全滅撃攘して日本の勢力を上海方面から驅逐しようとする云ふのが蔣の肚裡で、極めて周到なる準備を以て、大兵團を集中して不法にも、警備の陸戦隊を襲撃し來つたのが、抑もの第一次上海事變であつた。

現地警備の我が艦艇及び陸戦隊は、寡兵よく之と戦ひ、遂に我が陸兵の派遣上陸となつて、蔣介石の企圖と兵力を粉碎してしまつてこゝに上海停戦協定を見るに到つた。夫れは丁度昭和七年三月始めであつた。

私は、自分が海軍大臣在職中から引續いて此の上海事變が起つた關係上、この

上海停戦協定が纏ると、直に所在陸海軍慰問と現地視察の爲、上海に赴いて白川義則派遣軍司令官（故大將、男爵）野村吉三郎第三艦隊司令長官（後の大將）を訪問し、親しく彼我攻防の生々しき戦跡を視察し蔣介石の腹黒き野望の一端が窺ひ得られた。

昭和十二年七月、蘆溝橋事件が起ると、この日支間の停戦協定など固より眼中にない蔣介石は日本を上海から驅逐するはこの時とばかり、直に麾下の兵力を配して日本居留地を包圍し忽ち第二次上海事變が勃發したのであつた。

支那事變に於けるこの第二の上海事變は國際的な場所柄ではあり、夫れに我が陸海軍の戦果が如何にも華々しいので、特に世界の視聽を集中したのも當然であつたが、事變はいよゝ／＼擴大して、やがて南京攻略となり、漢口占領となり、燎原の火の如く底止する處を知らず、遂に今日の大東亞戦争に迄發展したのは、皇國の爲、大東亞將來の爲、將た又、世界平和の爲に大幸であつて、全く神意と申すの外はないのである。

然して、大東亞戰の立上りの第一撃で、上海にある、米英蔣の全勢力を芟除驅逐し、全く大東亞共榮圈内の一開港都市として、根本から、その面目を一新するに至つたのは、邦家にとり慶祝に堪へないところで、私に取つては第一次上海事變を回想して、眞に感慨無量なるものがある。夫れに付けても大東亞の叛逆者蔣介石は何んとしても徹底的に打倒してしまはなければならぬ。

米英の焦慮と其戦備

早いもので、支那事變は、こゝに五週年を迎へたのであるが、今も申す通り、この支那事變は、實に大東亞戰爭の主要なる一環をなすもの、即ち重慶政權を撃滅する事は、自から米英の手足を斷つことであり、米英を潰滅する事は又、自から重慶政權を屈服させる所以であつて、皇國大作戦の本筋として現に陸上に於ては北、東、南の三方面より實力を以て蔣介石を壓迫窮追して、大東亞戰の中核たる支那問題の解決を圖つて居るのである。

更に海上に於ては、益々米英撃破の矛を振りかざし、今や印度洋を通じて、我が觸手は遠くマダガスカル島やアフリカ東岸に伸び、北はアリュシャン列島の攻撃となり、ミッドウエー島の急襲となり、南はニューギニア東端からビスマルク群島、ソロモン、ギルバート群島を占領して正に濠洲を包圍するの態勢を張り、更に北米バンクーバー島及びオレゴン州の砲撃爆撃にまで進展し、最近には大西洋に迄その繩張りを擴げつゝあるのである。

米英も今は明かに自國の敗戦を認めて居るが、その真相を發表すると、民論の囂々が怖いから、ひた隠しに隠し或は損害を小出にして、ひたすら國民の眼と耳を蔽ふてゐるのである。とにかく今日に於ては、英國は最早獨り立ちが出来ないで、一にも二にも米國に頼つて居り、今後の作戦指導は主として、ルーズヴェルトの方寸にあると云ふ實情である。

そこでルーズヴェルトとしては、最後の策として米國の資源と生産力の利用擴充に大馬力を掛け、徹頭徹尾持久戦を以て相手國の資源を消耗枯渴せしめ、然

る後一氣に之を壓倒するのだと云つて、日本に對しても頻りに一九四四年（昭和十九年）の反撃を絶叫してゐるのであるが、布哇や馬來沖海戦以來、餘りにも手痛い敗戦に、聯合國に對する威信も全く地に墜ち、國內輿論も愈々沸騰し來つて政府當局も全く頭痛鉢巻の態で、外に打つ手もなく、唯頼む所は海軍勢力の恢復即ち優勢なる戦艦、航空母艦多數の急速建造であつて、苟も日本に優るだけの戦艦、航空母艦の竣工さへ成らば、一舉に攻勢に轉じて、思ひ切つた復讐をやらうと云ふのであるが、遽か作りの戦時態勢が未だ充分に整はない。

今日に在りては物資も不足であり、ストライキも續出と云ふ譯で仲々希望通りには運ばない。

實際ゴム、錫などの缺乏は甚大の苦痛で、此の五月始めに米國物資調査局長官ヘンダーソンが上院委員會で説明した處によれば

「米國のゴムの輸入の九十八パーセントは西南太平洋からであつたが、これを日本が抑へて居るので、全然入らない。本年中に米英聯合國のゴムの輸入は四

十三萬四千噸、人造二萬五千噸であるに關らず、これに對し、需要は八十七萬四千噸で、不足四十一萬五千噸は貯藏品を以て充てるの外はないのであるが、本年始めの貯藏品は六十九萬三千噸であるから本年末の貯藏量は二十七萬八千噸に減じ、更に明年度の需要を考へてみると、米英側輸入は十三萬五千噸に人造十六萬五千噸合せて三十萬噸に對し、その需要は總額百四萬七千噸に増加の見込であるから、結局四十六萬八千噸の不足となるのである。米國は是非共、明年は三十萬噸、明後年は六十萬噸の人造ゴムを生産しなければ立ち行かない云々」

と述べて居る。

又、五月三十日の米國電報によれば、自動車のゴムタイヤを盗んだ者にニューヨーク裁判所が死刑の判決を下したと云ふ大袈裟な騒ぎがあり、英國では又、最近食料の配給を扱ふ卅三歳の或町會の主任が、町内の頭數の内に出征者の名を加へたり、又居りもせぬ名前を偽造して、餘分の配給券を發行し、之を知人に利益

的に分配したことが發覺して、それが死刑に問はれた計りでなく其の母親と許婚者は懲役十八ヶ月、切符を受け取つた八人の知人も、各禁錮一年に處せられたと云ふ、丸で想像も及ばぬ様な情報が傳はる等、正に米英等は死刑濫發の奇現象を呈して居り、物資缺乏に對する極端なる狂氣ぶりが眼に見えるやうである。

又、平素有り餘る程の米國の鋼鐵も民需に對しては今日は極度の缺乏で、五月四日附の發令に依れば、米國人の最も嗜好品とされて居るラジオ機械——此のラヂオ工業は米國に於ける大産業の一つであつて、年に二億數千萬弗の生産をなすと云はれる——そのラヂオや、蓄音機、夫れから女の頭に大切なヘヤーピンや日常ななくてはならぬ萬年筆迄、その製作を禁止せられたと云ふ事である。

加之、ユタ州地方の既設縦貫鐵道のレール百十六哩も外して、之を製鐵所に運び、海軍用に供したと云はれ、或はヘンリー・カイザーのオレゴン造船所は鐵材不足の爲、七月には建造豫定の船舶數を前月より五隻程見合せたと云ふ様な實狀にあるのであり、更に又、石油は給油船が獨逸や日本の潜水艦に狙はれ、しかも

此の給油船の沈没に限つて乗員は一人も助からぬのが例のやうに云ひ傳へられ、船員は給油船に乗ることを拒むと云ふ有様で、石油輸送は絶望である。

元來米國ではテキサス州などの中部地區が大産油地域で、その産額は全米の八割一分、消費四割三分、カリフォルニア州などの西部地區は産額一割七分消費一割四分、ニューヨーク、ワシントンなどの東部地區では産額僅に〇割三分消費實に四割四分である。従つて中部地區では石油が有り餘つて、産油制限など勵行してゐるのに對して、東部のニューヨークや、ワシントン邊では石油の大缺乏で、極端な自動車の使用制限をやり、富豪は素より、遠方より通勤の役人や職工を泣かせて居るのである。

奇妙なもので平素石炭の國と云はれ、一年二億噸を出した英國が、今日は人不足で現に石炭の大缺乏に悩み、誰も彼もが日常生活の苦悶を訴へつゝあると同様に、世界の石油の七割を産出すると云はれた米國が、石油に困つて悲鳴を上げ、鐵の無盡藏を誇つた米國が、全く鐵不足に窮して居るのも、云はば自業自得で餘

りに自國自慢が過ぎた天罰であらう。

實際、米國の今日の苦境は想像以上で、軍艦の工事など容易に進捗しないが、假りに豫定通り竣工したとしても、戦艦の如きは第一乗る人が揃はぬ。本年度の米國の海軍人員は二十八萬六千人の豫定であつたのを、大東亞戰以來急速擴充を計つたが、この十月下旬ノックス海軍卿の發表によれば「米海軍兵員は現在約百三十萬人に達し、その内正規の海軍兵員百萬人、海兵（日本の常設陸戦隊員）二十萬人、沿岸守備兵十萬人で尙ほ増加しつゝある」と、景氣のよいことを云つてをるが、正規兵百萬の内實際艦船の乗員としては、その四分の一も揃ふまい。更に大いに譲つて、乗員が揃つたとしても、海軍の殊に戦艦などの訓練と云ふものは半年や一年では實戦の役には立たないのである。

前世界大戰中に、私が、英國艦隊に従軍して居た時にも、新造大戰艦のタイガーと云ふのが、開戦後間もなくビーチー司令長官の麾下に編入されて來たので、艦隊の面々は非常に有力な勢力が加はつたと大喜びであつたが、愈々ドッガーバ

ンクの海戦となつて、獨逸の艦隊と射ち合つて見ると、本當の射撃訓練を経てゐないから、彈丸が當らない。彈丸の當らない戦艦などは無いも同然で、見かけだけは大きな戦艦が出來ても、戦闘力にはならない。

このドッガーバンク海戦には、獨逸の巡洋戦艦ブリュッヘルを撃沈し、英國艦隊の勝利となつたが、長官の旗艦ライオンが大損害を被り、戦ひ半ばにして戦場を離るゝこととなり、結局決戦を見るに至らなかつたもので、この合戦の直後ビーチー長官は私に對し、タイガーの代りにクインメリー（私の乗艦で射撃訓練の特に優れた巡洋戦艦）でも加はつてゐたら、敵の大艦をもう二隻位は遣つ付けたものにナリ、とつくづく嘆聲を漏して居た。

よし又、その訓練が相當に進み得たとしても、その精神力、その意氣込が、今の米英式では、到底我が海軍の敵ではなく、そのみならず米英戦艦は、太平洋に於ける今日迄の日英、日米の海戦に於て、日本の航空襲撃の腕前には全く懲り懲りして、その前には絶対に威力が無くて出て來られないのである。

左様な譯で、彼の珊瑚海々戦以來、米國は戦艦の建造を、手控へて居つたが、今般いよ／＼航空母艦の建造に、全力を注ぐ事に議會で決議したのである。

即ち米海軍は去る六月十六日、戦艦主義を第二次とし、當分航空母艦建造を第一主義とする米海軍の根本編成替を意味する、八十五億弗の新擴張案を議會に要求したのである。

同建造案では、まだ建艦に着手されてゐない、六萬噸型モンタナ級五隻の建造を中止し、之により捻出された建造資材と能力を、航空母艦五十萬噸、甲乙級巡洋艦五十萬噸、驅逐艦並に、護送用艦船九十萬噸とし、合計四百隻の艦艇製造にふりあて、航空母艦を戦闘部隊の主力として、近代艦隊の新編成に着手することになつたのである。

つまり、本年中に進水するものを合せてワシントン級戦艦四隻と、四萬五千噸アイオワ級の戦艦六隻は竣工させるのであつて、決して戦艦の建造を中止したものではない。近來日本の新聞雜誌其他で、米國が愈々戦艦建造を斷念した様に聲

を大にして論議宣傳してをる向もあるが、夫は大變な誤りで、單に航空母艦の建造を積極的に促進して、急場の間に合はせ様と云ふので、全く未着手の大戦艦のみを中止したのであり、實は艦型そのものの計畫變更の爲にも、中止の必要があつたのである。又甲巡の一萬三千噸型ボストン級八隻の内四隻と重巡二萬五千噸型アラスカ級六隻は、進水の後航空母艦に改造急製するのだと、議會で海軍委員長のピンソンが言明してをる。

尙、この母艦勢力増強をめざす新編成が完成すれば、米は約八十五隻（巡洋艦及び商船の改造も加へて）の母艦を所有することになる。又、多數の航空士官養成をめざして、學生を驅り集めることに大童になつて居ると傳へられて居る。

思ふに今後の米國は、當分主力艦隊の決戦を斷念して、主として航空集團戦法をとり、潜水艦を以てするゲリラ戦法と相俟つて、日本を惑亂する事に方針を改め海上權のやりとりは今日の處暫く之をあきらめたものと斷定する事が出来る。實際それ以外には、一寸手の出しやうがないのである。

それにしても太平洋に根據地や基地が無くては、策の施しやうがないので、濠洲には、今迄にない力こぶを入れて居るのであつて、これは將來、自分の領地に入れやうと云ふ野心によるので、寧ろ英本國に對する以上に、關心を持つて居ることは、最近に於けるソロモン群島奪還に對する、眞剣な攻勢作戰によつても其の積極的な意圖は、察知せられるのである。

實際、航空機や、艦船の物質的増産急造を得意とする米國を相手として、濠洲の北部邊境で、今日の様に、彼我の間に、航空機や、兵力の消耗戦を續けると云ふのは我國としては仲々容易ならぬ事態である、然し我國は何んとしても、この事態に打勝たなければならぬのである。

チャーチルとルーズヴェルト

申す迄もなく、米國は輿論の國である。輿論の國の弱點は、誤れる輿論が政治を動かす、軍略を左右し、遂にはそれが一國の運命を決するに到らぬとも限らな

い。この點は、今日、英國も同様で、チャーチル首相の如きは、とかく軍略に口を出すと云ふのが、前大戰の海軍大臣時代からの評判で、開戦の初期に獨逸軍が、ベルギーに侵入するや、チャーチルはアントワープを救援すると云ふので英國の海軍陸戦隊を出兵し、獨逸軍の爲に包圍されて惨々な目に遭ひ、更に土耳其のガリポリ半島に出兵するに就ても、軍令部長フィッシャー元帥や海軍顧問ウキルソン元帥の反對があつたに關らず、之を決行して、遠征軍の大半を失ひ、海軍艦艇にも重大なる損害を招いて、大失敗を演じた實例がある。

朝野の非難攻撃の結果、機を見るに敏なるチャーチルは、逸ち早く海軍大臣を辭職し、即座に陸軍中佐の軍裝に身を包んで佛國の第一線に出陣し、忽ちにしてその名聲を取かへした。

それが今日の大戦となつて、現に首相として、國防大臣を兼ねて居るのであるから堪らない、今度の大東亞戰勃發の際のプリンス・オブ・ウェルズやレパルスの東洋急派の如き、米國の尻馬に乗つて、日米開戦せば英國は一時間以内に日本

に對し宣戰を布告すると揚言し、日本威嚇の積りで政略的行動に出でたのが抑も失敗の因で、見事、我が海鷲の好餌となり、世界の物笑ひを招いて、英國にとつて、とり返しのつかぬ大損害を來したと云ふのが真相で、英國上院議員チャットフィールド海軍元帥が議會で之を素破抜いて、痛烈に、コキ卸ろしたのも當然の話である。

このマレー沖海戦の心痛い實物教訓にも懲りず、五月上旬珊瑚海に米英聯合艦隊を強いて出動せしめ、戰艦艦迄大打撃を蒙つた。これも確かにチャーチルとルーズヴェルトが戰略に嘴を入れての失敗であらう。

更に此夏八月にソ聯が愈々敗退の危機に直面し、スターリンが米英に對し頻りに第二戰線實現の斷行を迫つたのに對し、チャーチルはその申開きの爲自身出馬してモスクワにスターリンを訪ひ、十二日より三日に亘り會談する所あつたが、十五日にモスクワから埃及に飛んだかと思ふと、十九日には忽ち英海峽の佛國北岸ディエツプに、申譯の第二戰線として上陸作戰を決行したのである。

その兵力は英、米、カナダ、ドゴール各軍より成る約一個師團で、獨逸警備隊の爲に一舉に擊攘され、戦死三千五百、捕虜一千八百を失ひ、驅逐艦、水雷艇、輸送船等十三隻を擊沈せられ、巡洋艦以下十九隻に大損害を被り、更に沖合にて上陸待機中の艦隊及輸送船にも相當の被害があつた、此の無謀なる敵前上陸は軍事眼から見れば、相當に問題となる處であつて、畢竟するに例のチャーチル一流の政略的軍略の一產物でもあらうか。

今度、野村大使が、米國からの歸途、淺間丸船中で話された一節に、
「ルーズヴェルト大統領はウイルソン内閣の海軍次官をつとめ、海軍の智識は相當にあり、自他共に海軍通を以て任じて居るが、日米交渉の大詰に迫り、ルーズヴェルトに會つた時、ルーズヴェルトは廣い太平洋で戰爭すると云ふことは非常に難かしいと云ひ、艦隊が基地から千裡離れると、戰闘力は何パーセント減ずるとか更に千裡離れると、又戰闘力が何パーセント減ずるとか、一々數字をあげて私に説明した」

とあるが、彼れも一とかどの軍略家を以て任じてをるのであつて、チャーチルや、ルーズヴェルトは輿論から動かされると云ふよりも、寧ろ自分の己惚れから来る野心の現れから、戦略上の事でも何でも自分の思つたことを實現しようとするのである。

しかし、何と云つてもルーズヴェルトは、今日は極端なる獨裁主義で、思ひ切つてその實力を展開するのは素晴らしいもので、米議會は一九四〇年六月以來、既に六百八十億ドルの國防費支出を承認した。

これは本年六月迄で、それを足れりとせず、本年始めの議會教書で、更に此の七月から一ヶ年五百八十億ドルの支出を通過させ、これで從來の擴張案以外に、飛行機六萬、戦車四萬五千、船舶八百萬噸、來年夏には飛行機十二萬五千、戦車七萬五千、船舶一千五百萬噸の増産を豫定し、更に今度は航空母艦大建造案で、八十五億ドルと云ふ巨額の新擴張案を通過させ、最近九月二十九日には又、對日本攻撃海軍爆撃機の大量急造の爲、二十八億六千萬弗の追加豫策を要求したのみ

ならず十月一日には米國大統領始まつて以來、未だ嘗てなきインフレ防止案、即ち物價統制の大権限を大統領に附與するの提案（その骨子は大統領は賃金、俸給及び農産物最高額決定上廣汎な権限を使用すること）をすつたもんだの末強制的に議會で可決せしめ、次で同じく十月一日附大統領令で「戰略及び軍事行動に關する命令は今後大統領が發令し、その他は陸軍卿が發令する」と發表した。

事實上ヒットラーやスターリンと肩を並べ全くの獨裁帝王となつてしまつた。

兎に角、ルーズヴェルトは生れながらにして日本が嫌ひなのである。昭和七年秋であつたか、滿洲事變の後滿洲國の建國せられた際、米國政府は之に不承認の意を明かにした。時の大統領フーバーは新に當選して未だ就任はしない新大統領ルーズヴェルトに對し、現政府の滿洲國獨立不承認の決定を其儘繼續されたい旨を申入れた。

處がルーズヴェルトは之に同意の色があるので、民主黨の袖領等は國際上の大問題に關し、大統領就任前に諾否を言明するは、考へ物だと云ふので忠告した

處、ルーズヴェルトは自分の父は支那に於て、商賣に儲けて吾家の資産を起したもので自分は支那に負ふ所があり、従つて支那を壓迫する日本は性來好まぬ、滿洲國のことは自分に任かされたとして、忠言を斥けたと云ふ話である。

夫れに今次の大東亞戦争の眞珠灣の一撃は、怨み骨髓に徹してをるのであり、現にこの九月三日全國の青年に對して「世界の地圖から日本を抹殺したい、若し夫れが不可能ならば、日本人の血の最後の一滴迄絞り盡してしまふ」と豪語して居るのである。又九月三十日には米のマーシヤル參謀總長、キング作戰部長等が、ソ聯軍の危機増大を前にして、頻りに歐洲上陸作戰の敢行を主張したに拘はらず、ルーズヴェルトはこの意見に反對し、歐洲にその第二戰線を結成するよりも寧ろ、太平洋方面の日本に對し、作戰の重點を置くべしと強硬に主張するなど、よくよく日本が憎いのであつて、最近の航空母艦の大建造も、渡洋爆撃機の大擴張も蓋し所以ある哉である。併しながら、餘りにも己惚れが過ぎての獨裁が嵩じて、重大な軍略作戰を左右し、遂には生兵法の大疵が、自分の國を亡すの因とな

らないとは誰が保證するであらうか。

歐洲方面の戦局

一方、歐洲方面を見ると、北阿の獨逸、伊太利の新攻勢は頗る目覺しく六月二十日、問題のドブルクを占領し、引續いてエヂプト國境を突破、一氣に急追撃で、マルサマトールの要塞を粉碎し、更に東進して英國最大の據點アレキサンドリアに急迫せる其の猛進さは、英國朝野を震駭し、全世界を驚倒させた。

實際その戦果は、北阿及び西亞方面の英勢力に一大痛棒を喰はせ、世界戦局にも容易ならぬ影響を及ぼしたものであるが、アレキサンドリア要塞とカイロ間三角地帯の正面では兩軍相對峙したまゝ、一寸休戦の状態であつた。

蓋し、盛夏のエヂプト地方の暑氣と云ふものは、日本の暑さとは桁違ひで、標準の置き方が、まるで違つて居ると云はれる。日本では暑ければ薄着をし、又は裸體となつて暑さを凌ぐのであるが、エヂプトの夏は、暑さが加はると着物を重

ね、更に毛布をかぶり、頭づば袋ぶくろをまとひ、足に毛皮の靴を履いて、外部の熱氣が侵入しないやうにするのだと云ふ。

獨逸が、英軍等の知らぬ間に、冷房装置の戦車を作り、熱砂を縦横に活躍して、英國戦車を追つ拂つてしまつたのも所以ある哉である、夫れで獨逸軍では當分代りあつて、將兵に休暇をやつて居る隊もあると云ふ。

或は秋風そよぐ十月頃にもならば、獨逸、伊太利の大攻勢あるに到らんかとも察せられたが、英軍は一寸機先を制して、一と足先きに攻勢を開始し、しかも優勢なる大空軍を用意して掛つて來たので、獨伊軍は豫定の陣地まで退却した様である。

又、獨逸とソ聯戦争に於ては、ロシアの母と呼ばれる、ヴォルガ河を扼する要衝、スターリングラードの陥落直前まで進み、黒海の海上権も樞軸側に落ち、尠くも東部地中海の海上権は、英國の手を離れんとして居るのみならず、獨逸はコーカサスを席捲する勢にあり、西亞の戦勢は、遠からずイラン、イラク争奪戦に

進むべく北阿のスエズ運河と相俟ち、戦局は樞軸側に一大發展を見るに至るであらふ。もしそれ、これに呼應して日本が、マダガスカルからアフリカ東岸にかけての、印度洋の制壓から更に一步進めて、ベルシャ灣から紅海迄も日本の繩張りに入れる様になれば、米英のアジアに對する交通路を遮斷するのみならず、日本と獨伊との握手が成立し、印度の獨立も自然實現の色が濃厚となるであらう。

又、ヨーロッパと東洋との間に、物資の融通も可能となり、樞軸側の戦争持久力は、いやが上にも強大となるのであり、日獨伊不敗の地位は、いよ／＼固く、一筋に大勝利の場面に直進することになるであらう。

今日のところ米英は、大西洋を連絡面として協同作戦に至大の利便を享有してゐるが、獨伊と日本とは西部印度洋と、ソ聯と西亞とが中間の隔遠物となつて、互に手が握れず、隔靴搔痒の感なきにあらずであるが、印度洋とアフリカの東北部と西亞方面とが、我々の手に入るとなれば、樞軸國に取りては非常なる大利便となり之に反比例して、米英側の世界は、單に大西洋とアフリカの西中南部に極限せ

られ、夫れ丈けを唯一の交通線、兵站線として、蠢動する外はないことになる。そこで世の中は、太平洋のゲリラ戦と、大西洋の交通破壊戦とで、對局はいよ／＼眞剣となり、深刻となり、結局、船腹問題よりして、米英側は遂に屈服のやむなきに至るであらう。

第一次大戦に於ける獨逸の潜水艦戦

ここで参考の爲に、一つ第一次世界大戦に於ける船腹問題の真相に就て一瞥すると實際、英國はもう尠しで危なかつたのである。開戦後一年半を経た大正六年二月から、獨逸は無制限潜水艦戦で英に對し、水中封鎖戦を開始した。

その四月が英國にとつては大惡月で、撃沈四百七十隻、八十七萬噸と云ふ船が、貨物と共に海底に沈んだ。尙、二月から六月迄、平均月に三百三十隻、六十三萬噸の船が沈み、これに對し、新造船は英、米、佛、伊、日等の聯合國總出で、やつと月に三十萬噸を出でぬと云ふのが實狀で、英國に取りては直に國家存

亡の死活問題となつて來た。

とにかく大正六年秋から翌年秋迄の一ヶ年間に、英國に於て國民の生活上又、戦争繼續上是非共海外から輸入せなければならぬ軍用資材及食糧の總額は、最少限、二五〇〇萬噸を必要とする。又佛國は食料三八〇萬噸、石炭二四〇〇萬噸、鐵一〇〇〇萬噸、合計三八〇〇萬噸を必要とする。更に伊國に於ても同様、石炭、鐵、食料を合せて二〇〇〇萬噸を缺ぐことは出來ない。即ち英、佛、伊を合せ、この一ヶ年間に最小限八三〇〇萬噸の輸送が無ければ、戦争の繼續は扱て措き、國民の口が干上るのである。

かやうな次第で、各國は潜水艦に對し必死の對應策をやつた。即ち船腹の調節輸出入の制限禁止、船舶の急造（これは造船職工を全部戦線から呼び戻し）食料制限（肉無デー、パン無デー、芋無デー等の勵行）輸送船團護送等、種々苦心を重ねたが、最も力を注いだのは、敵潜水艦を撃滅し、その活動を制限する方法であつて、機械水雷と鐵の網で海の中に柵を造り、この柵から外へ出られぬやうに

したのであるが、此の海中の屏風とも云ふべき機雷の網付柵で、最も大袈裟なのはスコットランドの北端から、ノールウェーの西岸迄延長實に二三〇海里（東京と神戸間の直線距離）に亘り、鋼鐵の網を張つて夫れに無慮七萬餘の機械水雷を附した、實に夢にも想像しなかつた大規模なもので、これは相當に効果があつたと云ふ事である。

かやうに英佛側は百方、潜水艦の對應策を講じたが、翌大正七年春になつても新造船の噸數は撃沈噸數に及ばぬこと、毎月十萬噸以上で、世界の商船は漸次減少する一方、英佛伊の豫期した物資輸送は果して達せられるや否や、頗る憂慮せられた處であり、現に英國內の食糧利す所僅に三週間と傳へられたのもこの時であつて、潜水艦の活躍と船腹の減少の爲め、英佛が遂に屈服の已むなきに至るか、夫れとも獨塊側が自給の力盡きて先づ降服するか、此の時分が天下分け目の洵に重大なる時期であつたのである。

然るに、英佛側の必死の努力は漸次功を奏して、商船の新造力が高まり、同年

四月からは、新造船の方が沈没船噸數よりも超過するやうになり、悲觀された船腹問題も辛うじて解決し、ここに英佛側は始めて愁眉を開くに到つたのである。

爾來、英佛の船腹は日を逐ふて餘裕を生じ、物資の輸入は充分となり、益々有効に戦争を指導し得たのみならず、新に參戰の米國もその十月迄に、無慮二百八萬と云ふ大兵を大西洋を越えて輸送するなど、英佛側の前途は愈々有望となつて來たのに反し、獨塊は依然として嚴密な包圍的封鎖を被り、物資缺乏其極に達し、百方努力の自給策も最早續かず、陸戰に無敵であつた彼れ獨逸も養ひを絶たれては驍征かすで、その十一月十一日（大正七年）遂に矛を投じて、降を軍門に乞ふに至つたのである。

米英の憚む船腹問題

然らば、前世界大戰の水中封鎖戰の實績より推して、今日の英米船腹の實狀は如何であるかと云ふに、日獨伊樞軸國海軍の縱横の大活躍により、米英兩國海軍

はもとよりその海運又、日を逐うて窮迫の度を加へつつあり、事實我が潜水艦が遠く印度洋から、太平洋の北米西岸一體の制壓に加へ、遂に大西洋に迄、通り魔の如く鬼面を浮べたのに相呼應して、近來獨逸、伊太利の潜水艦及び航空機の活躍亦、頗るめざましく、北氷洋、北大西洋は申すに及ばず、カリブ海、南大西洋方面迄その觸手を伸ばし、セントローレンス灣や、ミスシッピイ河口邊にも出沒を傳へられ、船舶殊に油槽船撃沈の報道は、日々の新聞を賑はしてゐる。

斯くてその喪失せる船舶は果して幾何に達してをるか云ふに、今次世界大戦開始以來、本年九月迄に、喪失せる百噸以上の船舶は實に二千二百萬噸乃至二千三百萬噸と概算せられ、前世界大戦中の喪失量、千五百萬噸を遙かに超過してをり、世界總船舶六千八百萬噸の三分の一は、既に海底に葬られたのである。

この中、英國のものは、尠くとも千七百萬噸と推定せられる、英國今日の持船は差引千八百萬噸を割るか割らぬかと云ふ處で、其中から損傷修理船や軍用、官用等の船を差引くと現下海上輸送用は高々七百萬噸しかないのである。

備考 英國の戦前の持船二千百萬噸

中立國、敵國等より奪取したもの……………九百五十萬噸

購入したるもの……………百五十萬噸

新造したるもの……………三百萬噸

合計 三千五百萬噸

九月迄の喪失 千七百萬噸を差引くと

現有……………千八百萬噸

右の内損傷修理中……………三百萬噸

軍用官用及輸送不適のもの……………八百萬噸

残量……………現下輸送用……………七百萬噸

これだけしかない。

然して、英國平時の輸入物資は、六千萬噸乃至七千萬噸であり、如何に之をきりつめても、國民の生活上、又た戦争繼續上、最少限五千萬噸は必要である。

この輸入に一年三千八百萬噸の船腹が入用なりとして、三回半乃至四回轉と見積つて、どうしても一千萬噸の船舶は入用と云はれて居たが、英國は豫てからの莫大な貯藏品と國內の耕地増産極度の獎勵とで、船舶は六百萬噸あれば、今日はどうか生きて行かれると云ふのが本當らしい。前世界大戰では、最少限七百三十萬噸の船舶で賄ひ得たのだと云ふから、夫れでよいのかも知れぬ。

又、米國の所有船舶は大東亞戰爭當初に千百萬噸であつて、古船が多く、船齡の十五年以内のもの百八十萬噸に過ぎないで、今迄の處割合に貧弱であつた。

要するに海上輸送用としては、七百五十萬噸見當であらうが、參戰前、商賣根性を出して、英國に二百九隻百二十萬噸を賣つたりしたのは失態であつた。殊に油槽船八十隻を讓つてしまつた爲、今日では自國の石油輸送にも大困りの奇現象を生じた、夫れのみならず參戰後の船舶の被害も却々多いので、頗る苦慮して居る處である。

米國は元來反樞軸國の兵器廠、軍需廠を以て自任して居り、資材の輸入、製品

の供給等に大量の船腹が入用であり、中南米操縦の爲にも、援英、援ソ、援蔣にも、又自國沿岸の交通運輸にも今日程、米國に船腹を切要とすることはないのである。

それが、米英兩國を合して輸送用船腹は、僅かに千三百萬噸に過ぎないと云ふのが、今日の實狀であつて、米國の大切な對南米海運連絡の平素の、配船四十九萬五千噸でさへ、之を停止した始末である。

之に對し、獨逸の潜水艦や航空機其他を以てする米英の船舶擊沈は、開戰以來九月迄に、無慮二千三百萬噸に達し、此の中、油槽船四百五十萬噸に達すると云はれる、今日でも、毎月平均の船舶擊沈百萬噸に及び、この九月の如きは、驚く勿れ百五十八隻百〇五萬三千噸と發表して居る。

尙、この外に、日伊の擊沈船舶も相當にあるのであるから、米英に取つては全く以て死活の問題である。

扱て又、聯合國側造船力の方はどうかと云ふと、英國は戰前百五十萬噸の造船

力があり、戦後設備も増加したが、いろいろの関係上、せいふく一ヶ月十五萬噸程度であらう。米國は本年一月六日、大統領教書で本年中に八百萬噸、來年一千五百萬噸の豫定で、躍起となつて努力中であり、實際、昨年造船高八十萬噸から見れば劃期的に増加して居ることは明かで、この夏以來は月に五十萬噸以上の進水を傳へられてゐるが、實際に竣工の數量は、毎月平均四十萬噸を出でないと推定せられて居る。

随つて、米英合せて、月に平均六十萬噸には達しまいと思はれる。

日獨伊が毎月百萬噸以上撃沈の勢を逞しうしては、米英は如何共策の施こしやうがなく、貨物船大量生産の掛け聲や宣傳は頗る大きいのが、実績は必ずしも之に伴はずで、持船は漸次減少する一方であり、座して死を待つと云ふ外はないであらう。

ここで一寸船舶の噸數の現し方を説明して置かう。

第一、總噸數……百立方呎の容積を一噸とした單位で船全體の容積に就き現は

したもので商船に於て用ひられる。

第二、排水量……船全體の重量であつて、軍艦に於て用ひられる。

第三、載貨重量……船が積み得る貨物の重量を現はすもので貨物船に於て用ひられる。

これ等の噸數の間にはほゞ一定の関係があるもので、例へば一萬噸の貨物船ならば、その排水量は約一萬六千噸となり、總噸數は七千噸位となるのである。

扱て日、獨、伊三國潜水艦及航空機の活動が米英の船舶に及ぼす被害の漸く甚大なるに鑑み、去る六月二十二日に、米國上院に於て、ヒル上院議員は、樞軸側潜水艦の對策として、七千五百噸程度の潜水貨物船の建造を、眞面目に提議したが、斯様な提案も彼等にとりては、決して笑ひ事でないのである。

又、九月十九日、米國戰時生産局長は、海上輸送の補助として空輸の目的を以て、太平洋岸のヘンリー・カイザー造船所に命じて、千八百萬弗の經費で、大型飛行艇（六十噸積二重胴體）三機を試作せしめて居り、尙ほ大量生産の設備をや

らせてをると云ふ。

又、米國グレインマーチン工場のマース飛行艇と云ふのは、七十六噸の飛行重量を有する最大型であるが、これを一年間に五千臺建造すると云ふ計畫を吹聴して居る向もある、蓋し船腹不足の補ひとしての新機軸を出そうと云ふのである。

今日の勢を以てすれば、米國船舶の大量増産はルーズヴェルトが聲を大にして叫んで居る通り、相當量の新造を見るに至らぬとも限らないが、夫れにしても海に乘出すその船員が間に合ふまい、現に荷物満載の船が、ニューヨーク邊の岸壁に横づけのまま、繋ぎ放しになつて居り、出港したいにも、乗る船員がないので大弱りの有様だと云ふ。

今春四月であつたか米國檢事總長が、在米の外國船員一萬八千名を逮捕したと云ふので大センセーションを起したが、それは強制的に危険な大西洋航路の米英船に乗り込ませやうとして、命令をきかぬ者をヒツ捕へて牢に入れたのである。

大西洋に於て昨年秋迄の二年間に沈没した英國船に殉職した船員は、四萬一千

人を越へ、今日迄には優に五萬人に達して居る。

米國船も大西洋で既に四百隻、三百萬噸は撃沈せられ、その船と運命を共にしたものは五千人に及び、中にも油槽船の乗組員の如きは、悉く全滅と云つてよい有様である。

英國使用の船舶並に乗組員の四分の一は外國々籍のもので、これ等の戦死者も既に一萬數千に及ぶと云はれる、實際米英の御用船に乗つて、大西洋へ出動すればその九十パーセントは、確實に死ぬと保険がついて居るのである。

外國船員で、此の乗船を免れんとするのは蓋し當然である、夫れを米國では法を以て之を強制し、聽かなければ牢に入れると云ふのだからたまらない。

勿論米國としては船員養成には大車輪であり、夫れに英國から沈没船で助かつた乗組員を加勢に仰ぐと云ふ手もあるので、船員の補充は甚しく憂ふるに足らぬと表向きは取繕ろつてをるが、實際には却々間に合はぬらしい。

兎に角、船腹の窮狀は米英に取りて實際想像以上の苦痛であつて、ルーズヴェ

ルトやチャーチルが、最も頭を悩まして居るのはこの問題であらう。

國民の覺悟が勝敗の鍵

現在の世界大戦も、かくて結局は此の船腹問題で戦争の繼續不能に陥り、民心の離反、國家の擾亂となり、やがて米英陣營の崩壊となり、米英は遂に滅亡に到るであらう。

その時期は必ずしも、遠い將來ではあるまいと思はれるが、さりとて、夫れが來年一杯とか、再來年の夏とか云ふ譯には參るまい。

何んと云つても、相手は世界の最大強國であり、頑張りに掛けては天下一を誇る彼等である。殊に米國は前言したとほり、最近大いに眼覺めて、官民共に對戰爭の努力に、一段の眞劍さを示しつゝあるやに傳へられる。

彼等の屈服の時期が、果して吾人の豫想通りに、遠からず實現到來するか否かは、主として我國々民の、今後の覺悟と努力の如何に關はつて居る。實際今度の

戦争は國民と國民との間の力比べ根くらべで、勝敗が定まるのであつて、最後の五分間迄頑張る方に勝利の榮冠は獲得されるのである。

惟ふに米國の國力と政府の意氣込よりすれば、その驚くべき戰備戦力は彼等の所謂四十四年對日攻勢の曉に、或は大平洋を壓して、日本を震駭せしむるに足るものあるかも知れないが、我れには固より之に對處する覺悟と用意がある。

然し夫れは別として、夫れ迄の永い期間、彼の國民はあとなしく手を拱いて待つてをるかどうか、第一自分の國が何の爲にこの大戦を戦つてをるか、戦争目的が一向にはつきりしない。

夫れに元來が個人の自由を謳歌し、氣儘勝手に慣れた、享樂氣分の旺盛した、駄々つ兒の様な米國民が、急激に身に迫つて來る物資缺乏、物價騰貴、徵用、増税等に悩む生活上の苦悶や、統制法規等に縛らるる窮屈さ、運輸交通の不便さ、慰安遊樂の缺如、肉親知友の頻々たる戦歿、戦さの前途に見込がないことなど種々雑多な事柄を、ジツト我慢して幾年かの久しき、よく丹心報國の堅き決意を維

持継続することが出来るかどうか。

更に又たルーズヴェルト自身は獨裁王の權化の様に自負してをるが、實際スタ
ーリンがソ聯の國民を、牛馬の如く自由に驅使統御する様な眞似が、米國民に對
して果して可能なりや否や。

斯様に考察して來ると、戦争に對する國民の覺悟の度合ひ、言ひ換へれば、彼
我の間の辛棒の較べ合ひからすれば、我が國民の方が寧ろ持久戦に堪へる資格が
ある譯ではあるまいか。そこで彼等は盛んに得意の宣傳戦、思想戦で、我國朝野
に働きかけ、先づ戦意を沮喪せしめ、その點で我に勝たうと、百方魔の手を伸ば
してをるのであつて、我國國民の特に留意を要する事項であり、又この思想戦や根
氣競べに斷然負けてはならないのである。

而して日本が、此の戦争に、最後迄踏ん張つて、勝抜く力と云ふのは、國民が
忝なくも宣戦の 御詔勅を奉戴して不屈不撓一意勝利に邁進するその力に在るの
である。嘗て

「……さびしからずや道を説く君」

などと、思ひ切つた作歌を發表して、その大膽な軟派型に時の世間を驚かせた
新自由歌壇の與謝野晶子女史にしても十二月八日の 御大詔には悉く感激して

日の本の大宰相も病むわれも

同じ涙す 大き詔書に

と謹詠して居るのである。

苟も日本人である以上、悉くが此の涙の感激に奮ひ立つのは當然であつて、今
日は、誰と云はず彼と云はず皆んなが一つになつて邁進すべき秋なのである。日
露戦争の時でさへ「國を擧げ心一つに奮ひ起つ、戦さの前に火も水もなし」と詠
みて熾烈なる愛國の熱情と確乎たる國民の心構へを表現したものであつた。即ち
勝利に邁進するその力である。

今この勝利に邁進するその力と云ふのを、實際的の仕事に當て嵌めて切り詰め
て言へば

第一が 國家の生産力を高める事

第二が 社會の不安を除く事

この二つにある。而してこの二つを成し遂げるには、何としても國民の自覺を昂め、國民が互に團結を固める外にはないのであつて、一億國民が渾然一體となつて、必勝の舉國體勢を完成せなければならぬ。

少し理屈に走る様であるが、自覺と云ひ團結と云ひ之を國民銘々の立場から考察して見ると、第一に吾人の重んずる所はこの世であり、第二に吾人の求める所は人間の道であり、第三に吾人の望む所は人間としての完成である。

第一のこの世と云ふのは、日本の今日と云ふ謂であつて、その今日は過去三千年の繋りである計りでなく、實は明日への出發點である事により重大なる意義を持つ、吾人の重んずべき今日は、明日を伴ひ出す今日でなければならぬ。

日本の今日を重んずる事は、日本の明日を貴ぶ所以であり、日本の今日の出發は、日本の明日の行方を決定するのであつて、今日程日本に取つて、大切なもの

はないのである。

第二の人間の道と云ふのは、御國の爲に身の限り、心の限りを盡すことであつて、特別に行き道がある譯ではない、要するに道と云ふのは、毎日己れが爲す仕事であつて、己の仕事に眞劍味を以て従事し、仕事を樂む迄に達せなければならぬ。

無念無想を以て働いて居る所に人生の一切は發展し、一切が歸納するのである、詰り働く事その事が人の人たる道であつて、働が即ち吾であると共に、天地であると悟らなければならぬ。

第三の人間の完成、即ち日本人としての完成と云ふことは、この金甌無缺の我が國體を擁護し、八紘爲宇の大精神を世界に布く日本の國民として、申分なき自己を完成することであつて、日本精神に於て之れが第一の緊要條件なのである。

扱て日本國民としての自己を完成し、日本人としての道を盡し、日本の今日を護り立てて行かうと云ふには、何うしても銘々が自己の現在に目醒めて、自己の

現在に最善を盡す外ないのである。

嘗て何かの本で斯う云ふ歌を見たことがある。

己が眼の力で見ると思ふなよ

月の光で月を見るなり

世間の人は自分の眼の力で月を見てをるので、別に誰れの御世話にもなつて居らぬと思つてをるかも知れぬが、實は月の光があればこそ、その月を見る事が出来るのであつて、夫れが月の御蔭であると云ふことを、人に訓へ人を戒めたものであらう。

實際誰の手も借りず、自分一人の腕で立派に仕上げた刻苦十年の事業でも、その働く間に、眼に見えぬ他の幾多の人の協力と天地の恩恵が、加はつて居ることを悟ると云ふ事が大切なのである。

いつであつたかある人から、心學の話を聞いたことがあつたが

「凡そ一つの仕事を一人の手で營んで居る瞬間に於ても、そこには萬人の協力

と天地の恩恵とが來り助けて、その働きを可能ならしめて居ることを忘れてはならない。要するに働は感恩感謝の純な姿であつて、その働が社會に與へ行く効果から見れば、萬人から受けたものを萬人に返して行く、報恩奉仕の營みであつて、一人が萬人に報ゆる過程として働きを理解すべきである」

と云ふ意味であつた。要するに國民銘々が、感恩感謝の念を頭に宿して、自己の働に最善を盡せば、その働は自から國家に對する最大の奉仕となり、又期せずして、社會を構成する結合團結となるのである。

この國民の今日に對する自覺と舉國の團結があれば、前掲した國家の生産力も自から高まり、社會の不安も當然除かれるのであつて、戰爭に對する國民の覺悟と必勝の信念とは、期せずしてその礎石が築かれるのである。苟も國民一人一人が眞に時局を理解し、孜孜として職域奉公の實を擧げ、必勝の信念を以て勇往邁進するならば、米英の屈伏は遠からず實現するのである。

今や帝國は開闢以來の、大征戰最中であるが、戰爭に關する限り、日本の勝利は、終極迄斷じて疑ふ餘地はないが、この戰爭は、敵米英側の屈服に依つて、今迄の歴史に示すやうな、世間並の平和交渉を以て終りとなるか、どうかは問題であると思ふ。

今次の戰爭は、大體、天下を二分して、樞軸側と聯合國側に分れて争つて居るのであり、その間に居中調停を試むべき、有力なる中立國は存在しないのみならず、そも／＼の發端から、双方が各々その戰爭理念を異にし、八紘爲宇の精神と個人萬能の自由主義とが思想的に對立しての戰爭である。

云ひ換へれば、世界觀に於て俱に天を戴かない諸民族が、二大陣營に分れての争ひであり、敗者必亡の眞劍な戰爭であつて、從來のやうな、國家間の單なる利害の衝突に基づくものではなく、妥協は絶対に許されないものである。

即ち、世界歴史の轉換、人類の運命を決定する、人類の嘗つて經驗したことのない大戰爭であつて、米英の多年の支配と侵略とを脱し、舊秩序を崩壊して、日獨伊の世界觀による、眞の世界秩序の建設が、成るか否か、日獨伊と、米英と孰れが指導者となるかと云ふ、全く生死巖頭の、天下分目の戰爭であつて、徹底的に相手をやつつけて、これを潰滅して終ふ迄、押しつけて、押しまくらなくては、斷じて矛を納めてはならないのである。

大東亞戰爭直前に於ける、米英等の對日觀は徹頭徹尾、貧弱日本の微々たる姿であり、戰火一と度開けば「六週間にして日本を屈服せしめ得る」と迄豪語する大官や將軍連もあつた位で、實際「日本の重要都市、工業地帯、鐵道線路の大部分が海岸線に近接し、而かも建築物の多くは木造であるから、空爆に依る焦土化は極めて容易だ」と云ふのが對日攻勢作戰の狙ひであつた。

殊に米國の國民共は唯だ何んとなく、木と紙で造つた家に住んでをる人間は、矢張「木と紙の様に脆弱だろう」と云ふ一種の魅惑的錯覺から、何んでもかんで

も日本與し易しの觀念に捉はれ、朝野共に日本の軍事力と經濟力とに付て、大なる誤策をなしたのであるが、わけても帝國の空軍力に對しては、其器材と云ひ、數量と云ひ、乗り手と云ひ、術力と云ひ、甚しく米英等に劣る所あるが如き推斷を以て臨んだ。之れが抑もの彼れ等の誤認であり失敗であつて、愈々起ち上つて見ると連戦連敗、全く手も足も出ない様に打ちのめされてしまつた。

處で、米英はこの敗戦を重ねるに従つて漸く眼が覺めて來たのであつて、米國の如きは、今や、開戦當初の混雜から漸く立ち直り、當局の戦争指導下に、面目を一新し、官民協力して、相共に、その經濟力、就中その生産力を頼んで、強靱に食ひ下り、執拗に反抗せんとする氣構へを示して居る。

殊に政府當局も、輿論の指導、宣傳の方法等宜しきを得て戦争指導は益々整備され、國民の抗戰意識は漸次強硬になりつつあるのであつて、この氣勢は決して輕視し去ることは出來ないのである。

即ち、米英兩國は生死最後の巖頭に立つて、その數百年來、蓄積した富と力と

を傾けて、我に戦ひを挑んで居るのである。

最近米國が今迄の防禦的に終始して居つた戦争のやり方を改めて、今度始めて北はアリューシャン群島、南はソロモン群島とに、同時に占領地奪還の攻勢的反撃を策した如きは、決して偶然ではないのである。

米國の戦力と生産力に付ては、曩に一通り述ぶる所あつたが、之れには色々情報も傳へられるので、今一應茲に補足することにした。

一體米國の戦時態勢は戦前から相當準備されつつあつたが、まさか自國が本當の戦争に巻き込まれ様など考へても居らず、全く油断をしてをつたせいもあり、國民全體を引張つて戦争を續行せんが爲に、遽か仕立ての戦時態勢に移つたと云ふ變り目ではあり、そこに多大の混雜や無理が起るのは當然であつて、やれ石油が足りない、鐵がない、砂糖が足りない、ゴムがないと騒ぎ立ててをるが、政府當局が思ひ切つて斷行した戦時態勢への移行は着々其效果を示しつつあるのである。

現に、艦艇殊に航空母艦の如き八十五億弗の豫算を以て、早急に八十五隻を完

成すると力んでをり、船舶も本年中に八百萬噸目標が、とても架空な數量の様に云はれてをつたが、何んとか五百萬噸を進水完成すると云ふ勢を示してをる。

米國は昨年始めには造船臺は百二十臺であつたのが本年三月には二百四十一臺に上り、本年末には三百臺迄に増設せられると云ふから、明年即ち昭和十八年には一千萬噸以上の進水を見るに至るかも知れない。

飛行機の如きは、例のフォード自動車製造會社が引受けて、宏大なる爆撃機工場をミシガン州の廣原中に、一ヶ年四億弗を擲つて建設、八萬五千の男工と二萬五千の女工、合計十一萬を集め、丸で一都會を新設して、大量生産に馬力を掛けてをり、夫れかあらぬか米國の本年六月の飛行機生産額は、既に月五千臺を突破したと唱へられてをる。

又、飛行機用アルミも、一昨年三〇萬噸を生産、今年は四〇萬噸で、目下の増産設備が完成すれば、百萬噸は生産可能の見込だと云ふ、夫れにカナダからも二〇萬噸は来るから、飛行機大生産にも充分間に合ふと傳へられる。

鋼鐵は可なり不足だと云ふ聲も高いが、昨年の生産八千四百萬噸、今年は八千八百乃至八千九百萬噸の見込で、運輸交通の不便、マンガン鑛の杜絶、屑鐵の拂底等の關係で一時大に不足であつたが、今後は何とか我慢出來ると云ふ。

ゴムは實際困つてをるが、前にも述べた様に買溜めで餘程助かつてをる、何んでも大東亞戰勃發後萬難を排して非常な冒險を敢てし、日本軍が占頭する迄にジャワとセイロン島から、無慮四十九萬噸のゴムを輸送したと云はれてをる。兎に角今のストックで明年迄は大丈夫、明後一九四四年は人造ゴム工場の完成で百四十四萬噸は製造可能で、需用には先づ充分だと云ふ事である。

石油は前に一言した通りであるが、統制を八釜しく云つて軍需工場に通ふ職工には充分にやる爲、之れに一年十五萬噸あてゝある、通常人の自動車は一臺いくらと非常に制限、之れは一舉兩得で自動車をムダに使はぬから、タイヤが傷たまず、不足のゴムの大節約になるのが狙ひだと云ふ。

錫も大缺乏で、罐詰やチューブが作れないで弱つてをるが、代用品を用ひ又船

腹が許せば、中南米から供給を仰いでどうにか忍ぶと云はれる。

船員の不足は實際容易ならぬ事態にあり、米國今後の深刻な悩みに相違ないが、船腹對船員の割合を調べて見ると、從來の總噸數百噸に船員一人半と云ふのが、普通の計算であるが今日は客船や客貨船などは造りもしないし、至極單純な貨物船のみであるから、船員は餘程節約も出来るし、船の百噸に船員一人か或は〇、七人でよいとも云はれる、結局五百萬噸の船に對し、三萬五千の船員があれば間に合うと云ふことであれば、問題は比較的に簡單である。夫れに英國其他の撃沈船から助かつた乗員が相當手が空いてをるから之を利用すると云ふ手もあつて、船員問題は餘り悲觀に及ばぬと説く向もある。

兎に角、今日の米國はその卓越した生産力に物を言はせて、一九四四年即ち昭和十九年末迄に戦備の大擴張を終つて日本に對し一大攻勢に出ようとしてをる。即ち同年末には陸軍兵力に於て四百萬、第一線の飛行機が二萬、海軍兵力に於ては艦艇二百六十萬噸、第一線飛行機が一萬五千機、之を完成して大攻勢に轉じ様

とするものである。

この準備期間中は、飛行機並に潜水艦等による消耗戰略を以て、日本の國力を少しでも減退させようと努めるのであつて、北はアリューシャンから布哇、東南諸島、濠洲に掛け、最左翼には重慶を重鎮として、空中からと水中からの包圍に、オサ／＼怠りないと傳へられる。

聞て見れば成程米國としては、正に左もあるべきで、勿論輕視してはならない。我に待つあるの戦備を整へることが絶對切要であるが、今日の日本の身構へは、北の滿洲、西の支那大陸、南の大南洋、東の太平洋と放射線を描き、その各々の外線の連續は外敵に對する防波堤を形成し、而かもその内面に於ては軍事上經濟上、形勝無比の大東亞共榮圈を包擁して居るのであつて、その中核體として我が日本は軸心に占位し、海洋と陸面とを兩翼に收めて、世界無比の不敗不動の態勢を整へ、嚴然として控へて居るのである。

従つて、如何なる外敵に對しても少しも驚くに及ばず、又恐るゝに足らないの

である。但し戦力の準備は前言の如く、極力実施せなければならぬのは固より當然の話であるとして、扱てその生産方面を見ると、大東亞共榮圈内の豊富無限の資源は多々益々辨ずるのであるが、之を物にする大規模な生産設備は、今日尙ほ其建設の間に合はぬ所もあり、又既設の工場で能率の振はぬのもあつて、今後共大に努力を要することは言を俟たない所で却々油断を許さない。

由來物事は見様によつて、色々と思當の付け方を同うせぬもので、米國の戦力戦備に關する段々の話の内には、幾分米國方の宣傳の様な所もあるやに見える、この點日本人は些と正直すぎて、敵方の發表を何んでも眞に受けて、餘計な神經を尖がらせてをるのは警戒ものである。

現に八月一日の米國通信にも、自動車王のフォードが賀宴の席上で「余は個人的には最後の勝利が、聯合國側の手に歸するものと確信したいが、公平な所、今次大戦では何人も勝名乗りを擧げることには出來ないだらう」と云つて居る。

又、「ルーズヴェルト大統領は前に、米國の軍需生産量が樞軸諸國の生産量合

計を既に凌駕したと聲明されたが、實際には米國の夫れは未だ獨逸にすらも追いつてゐない、だから獨逸を決定的に超越し得た時に、米國は始めて反撃に付て語り得るであらう」と極めて卒直に述べて居る。

又、米國に永く駐在して、先方の實情を知り過ぎると、何んでもその事物に心酔ではなくとも、相當の最負目の見方をする手合ひも皆無とは云はれない、餘りに敵方の御膳立のみが宏大無邊の様に傳はつて、日本の民心をして不知^しくの裡に之れではとてもかなはぬ、及ばぬと云ふ様な、絶望や萎靡を生ぜしめる傾がある様では相成らぬと思ふ。

兎角戦争が永引くと、民心の弛緩に乗じて、敵方が思想戦を以て、挑み來ることもあるので、その方こそ反つて油断はならない。夫に付けても想ひ出されるのは、日本海々戦に於て、東郷長官が麾下艦隊に訓示せられた、七分三分の兼合ひの意義である。夫れは

「昔から戦場の心得として、敵が三分傷み、自分が七分傷んでゐると思ふと」

が、実際には五分々々の傷みであつて、兎角自分の傷み方を大きく見過ぎる傾きがあるから、敵味方の傷みが五分々々と思はれる時には、実際には自分は三分、敵は七分傷んで居るぞと心得て、一段と奮戦すれば夫れが戦ひを勝利に導くことになる」

と云ふのである。戦場に於ける損傷の度合の議論と、戦争中の彼我戦備戦力の比較とは一樣にはならぬかも知れぬが、敵の力を過大視することを警戒することは切要で、亦た以て吾々の負けじ魂の時折りの虫干しとして、一誦するに足らん哉である。

由來、戦争は意志と意志との戦ひである、頑張り合ひの争である、持久力の争である。従つて、總力戦たる近代に於て、特に然りであり、今後に於ける様相は各國が、その興廢存亡を賭しての戦であり、最後の五分間迄頑張り通したものに勝利の榮光は輝くのである。

そこで吾々の最も意を強うするのは、双方の戦争の行き方である。

米英の頑張り、絶望から脱して、舊來の自由經濟の甘き夢を貪らんとする最後の、あがきである。

日本の頑張り、今日の戦勝を益々擴張して、いよいよ光明にみちて、建設に進まんとする飛躍の努力である。

われは、今日迄の我が輝かしき大戦果に誇る事なく、戦争の峠は既に見えた等と油断に陥る事なく、米英の膨大なる戦備の外貌に畏怖することなく、國家の總力を擧げ、總機關をあげて、聖戦完遂の堅き結集をなし、舉國一致長期戦、持久戦の力比べにも、必ずこれに打ち勝たなければならないのである。

この夏、私は靖國神社に參詣してみると、境内には櫻の木も澤山あるが、百日紅も相當に植ゑられてあつた。

櫻は、敷島の大和心に喩へられて、朝日に匂ふ日本精神の華として我國の誇りであるが、百日紅は又、夕陽に輝く華として堅忍持久の特色があり、苦熱に堪ゆると云ふよりも寧ろ夫れを喜ぶ風情が見られ、二百十日、二百二十日の厄日を通

して、幾度か風雨に晒され乍ら、その色も褪せず、散つては又、その蕾は開いてその紅い花は、その名の通りに百日も咲き続けるのである。

今日の時局には、吾々國民は潔よく散る櫻の體當り精神を嘆へると同時に、百日紅の花の色にあやかつて、飽迄頑張り通すことが、是非切要であると、つくづく感じたのである。

海軍魂と葉隠精神

海軍魂は即ち日本魂である。日本魂が発しては陸軍魂となり、凝つては海軍魂となるのである。

我が國民は古來から日本魂と云ふ萬國無比の日本精神に培はれたもので、此の精神的傳統に就いては實に崇高なる、幾多の事蹟を持合してゐるのである。

彼の楠公父子の忠節の如き、赫々たる其の事蹟は、六百年後の今日忠誠無比の龜鑑として、嚴として我が國民の心を指導しつゝあるものであり、又赤穂義士の快

擧の如き、明治維新に於ける志士烈士の事蹟の如き、近くは日清、日露の戦役に於ける、將又、現在の支那事變、大東亞戦争に於ける、我が陸海軍將兵の壯烈果敢鬼神を哭かしむる態の事蹟の如き、何れも我が國民の指導精神となり、傳統となりて、所謂、丹心報國の生きた手本を吾人に教へつゝあるのであつて、日本の頼母しい所は此處にあるのである。

これを歴史の上に見ても、國家の興廢存亡と云ふやうな非常時に際會すると、その國の傳統的精神が自ら鋒鏑を現はし來るものであつて、國家が立つか立たぬかと云ふ瀬戸際では、傳統精神の底力程大切なものはないのである。

彼の開戦劈頭、眞珠灣頭に於て、我が特別攻撃隊や、航空襲撃部隊の發揮したる海軍魂の如き、正に一命を先づ君國に捧げて全精神を其目的完遂に集中し、一撃必殺の體當りに倒敵戦法の極意を體得實現したのである。生還固より期する所にあらず、唯だ傳統に生きるものであつて、全く、世界に比類なきものである。

これこそ傳統的日本精神の精華であり、武器以上の武器であつて、どんな進歩

した技術を以てしても、作り得られない日本人だけの武器である。

敵を見付けたなら必ず之を攻撃する、攻撃は飽迄積極決勝的にやる、と云ふ敢闘精神を養ふことは申す迄もないが、生死を超越して、敵を殲さざればやまぬと云ふ必殺的信念に徹する迄、鍛へに鍛へることが、我が海軍の目指す訓練の極致であつて、昔より殲れて後已むと云ふ言葉があるが、己れは倒れても敵を倒さねば瞑目せずと云ふ不退轉の精神を、我が海軍に於ては所謂海軍魂として特別に鍛へ上げるのであつて、この鍛へ上げた海軍魂を、いよくと云ふ場合に華々しく陣頭に發揮するのである。

この傳統的海軍魂は「葉隠」にもよく現はれて居る。

「葉隠」の極意は徹底主義であり、主君に對する忠誠が、根本であることを教へたもので、徹底主義で必ずやり通す事と、精神力至上の意義を説いたものである。

然して、その第一義は、「武士道とは死ぬ事と見つけたら」と單的に喝破し、

それには自己を知り、自己の立場を知り、自己の國の歴史を知り、自己の國體の有難さを知り、自己の盡す道を知り、日本の國民としての當然の責務を了解知悉する事を強調してをるのである。

次に、精神力を説いて、先づ勝つことが大切であつて、自分が必ず相手に勝つ自信力を養成せなければならぬ。而して自分の責任上の大仕事を立派に背負つて立つと云ふ、滿々たる自信を以て勇往邁進するのである。

即ち、日蓮上人の「われは日本の柱とならん」との意氣である。

更にこの勝つと云ふことを説明して勝つと云ふのは、相手に勝つ前に先づ味方に勝つのである。味方に勝つと云ふのは自分に勝つのであり、自己に勝つと云ふのは、氣力で性と體とに勝つことである。つまり精神を以て肉體を支配する事であつて、自分が、何者よりも一番強いと云ふ大自信力が、いつでも現はれるやう修業して置かねば、敵に勝つ事は出来ない。

然して、武士の覺悟は何でも徹底的に、やり通す、飽迄頑張り通すことであつ

て、「死に臨んでも目的を達する迄は氣を張り通して死なぬ」と云ふ修業鍛錬を爲すことを説き、且つ斯う云つて居る。

「勇氣が大切に候、刀を打折られても手にて仕合し、手を斬り落されても肩ふしにて敵をほぐり倒し、肩が切離されるれば口にて敵の首の十や十五は喰ひ切り申すべく候」と又「大難、大變に遭ふても動顛せぬと云ふは未だしきなり、大變に遭ふて歡喜踴躍して、勇み進むべきなり」云々。

而して「端的卒直にして眞劍眞實で負けじ魂の徹底的頑張りを發揮し、しかも互に犠牲的精神を以て禮讓の徳を守り、仲好く一致團結すること、之れが葉隠氣質の總和であり全貌である」と述べてをる。

これを今日の大東亞戰に於ける、我が陸海軍將兵の戦闘ぶりに當て嵌めてみると、此の「葉隠」に説く日本精神が、躍如として陣頭に輝いてゐるのであつて、かしここの戰場に於て、ありありと展開し來るのである。

殊に年少紅顔花の如き海の荒鷲が我遅れじと大艦に襲ひかゝり、徹底的に敵に

肉迫、或は機體諸共眞一文字に敵體に衝突粉碎して、砲を所期の目的を達する敢闘必殺の海軍魂こそ、まことの日本精神の權化であつて、所謂武器以上の日本の武器である。

この點になると、米英等の西洋魂は、物は優秀であり、多勢であり、腕前もあり、勇氣もあり、當初の勢は頗る凄まじいものであるが、夫れが一合戦して、その機體なり操縦者なりに一度大傷でも蒙むると、

「あつ！しまつた、もうこれ迄だ」

と、忽ち意氣沮喪、心身顛動して、失神状態となり、その瞬間に萬事を斷念、放棄して、機も人も死滅してしまふのである。

我が海軍の機上の勇者が、平素の訓練にものを云はせて、身は死しても必らず敵を仕留めると云ふ烈々の意氣動作が、瀕死の大傷にも屈せず、そのまゝ働き續け、對敵必殺の効果を擧げるのに比して、その時間こそ一秒の何分の一と云ふ計算にも何にも上らぬ微細の差違であるが、その結果に至つては天壤雲泥、全く比

較にならないのである。

こゝが即ち、何時の戦に於ても彼我の戦果に、斷然たる隔絶を示す所以であつて、崇高なる我が國體の傳統精神の有難さと、海軍當事者の積年刻苦の修養訓練とには、我々はいつも泣かされるのである。

今日の大東亞戦下の我が國民は正に軍民一如、朝野一團となつて、肇國三千年來繼承し來つた傳統的日本魂をふりかざし、如何様な立場にあつても、常に卒先職域奉公の實を擧げ、此の戦争に勝ち抜かねばならない。

戦争に乗ずる米國の野望

戦争の理念に就ては、日獨伊の樞軸側の旗幟は極めて鮮明で、燦として輝くのに對して、米英陣營は、理念的に頗る惨めな境遇に轉落して、全く頭が上らない感がある。

一體恒久の平和と繁榮は對立ではなく協力によつて達せられ、權利ではなくし

て奉仕によつて初めて實現せられる、こゝに日本の戦争理念があるのであつて、米英流の利己的自由思想とは全く對蹠的なのである。

我國では昔よりの「人和して而して家齊ひ、家齊ふて而して國治る」を信條として絶對愛の家庭本位に國家を築き來つたものであつて、この信條を隣に施こし世界に弘め、之が大東亞共榮圈の建設の道義的基礎となり、平和的世界建設の理念となるのである、即ち八紘爲宇の大理想に迄進まんとするのである。

米英陣營の中でも、米國は從來の自由的放埒生活様式の保持を參戰の最大理由として、飽迄デモクラシーを旗印に翳し、永年獨善に耽溺して、省察の能力を缺いでゐる、米國民衆が、自國の旗じるしのうつろなのに氣附かないのを奇貨として、ユダヤ財閥の手先となつて世界征服の野望を逞しうしようと云ふのが實相である様だ。

處が、英國にとつては、このデモクラシーは迷惑千萬のお題目で、前の首相のチャンバレンにしても、今の首相のチャーチルにしても、米大統領の、このデモ

クラシー高唱には随分、手古ずり、大困りなのである。

由來、英帝國は古代の奴隸制度に近代意識の紛飾を施して、異民族の搾取を基調とする貴族的の國柄であつて、デモクラシーには、何としても調子が合はされない。

英國のみでなく、蔣介石の戦争理念も、このデレンマを如何する事も出来ないのである。

元々戦争目的が確乎不動と云ふ譯ではなし、米英の間に戦争遂行に關し、何かと行違ひや惱みのあるのは當然であるが、一體英國はその本國を守るのを最要の急務とし、その大兵團は主として之を本國の守備に任じ、外地の戦場に於ては多くは米國、濠洲、カナダ、ニュージラランド、印度、ドゴール、重慶、其他小弱國等の諸兵團を第一線に差し向け、自國の軍隊は能ふ限り消耗しない建て前を取つてをるのであつて、ソ聯を救はんが爲の第二戦線を作成するが如きは、始めから眼中にないのである。

所謂英國一流、狡猾極まる遣り口を當り前の様に、平氣で實行してをるのであつて、屬邦や小弱國は抗議は出來ず、いつも泣寝入りで、濟ましてをるのであるが、流石に米國の輿論は黙つて見てをられず、この十月九日發行の米國雜誌「フオーラム」は英國民に與ふる公開狀として、

「米國の戦争目的に付ては、米國人の間には恐らく一致した意見はないだらうが、英國の世界帝國維持の爲に戦つてゐるのではないことだけは、はつきりしてゐるだらう、こんな無遠慮な口は利きたくはないのだが、英國人に考へ違ひをして貰ひたくないから云ふのである。若し英國の作戦が英帝國の維持を目的としてゐるなら、英國の作戦をして我々の共同作戦に参加せしめよ、若し英國が聯合國を犠牲にして自分の帝國維持に汲々としていたら、きつと戦争に負けるだらう」

と毒つき、同じく十月十二日の雑誌「ライフ」にも對英國民への公開狀として「吾々は、はつきり宣言する、第二戦線は英國の爲には必要ないかも知らぬが

聯合國勝利の爲に最も必要とされる、吾々は英國の政治的讓歩を求める、君等は英帝國の爲のみに戦ふことを止めて、ソ聯やその他聯合國の側に立つて、吾々の陣營に参加せよ」

と鋭い一矢を放つてをる。

之に對し英國側も勿論黙つてはいない、「米政府は尠く共二ヶ年分の武器をストツクしていながら、何故聯合國へ貸與を惜むのか」とか「聯合國よ、掛聲ばかりでなく眞に聯合せよ」とか盛んに米國の不信を憤つてゐる。

何にせよ英國は本國防衛に主點を置き、海外の第一線には成る可く、自國以外の聯合國兵力を以て戦はしめんとし、米國は又、自分自身の利害と一致する場合に限り、所謂武器の援助をなすものであつて、實の所は米國は民主主義擁護の名の下に英國勢力の崩壊せる後の遺産の奪取を企圖してをるのだから、兩者の戦争目的は喰ひ違つてをり、戦争遂行方針は合致し様がないのである。

本當の所は米國は、今日の英國などはその眼中になく、この大戦争を奇貨とし

て、英國始めソ聯、蔣介石その他の小國の衰亡して行く後を受けて、その國々の遺産繼承を悉く我が一手に納め、世界征覇の野望を達成せんとするのが、彼れ米國の底意であり、野心であつて、さてこそ地球表面の各所に對し、與國援助の名義の下に、少し宛でも軍隊を派遣駐屯せしめ、今後の占領奪取の口實を、ちやんと今から作成準備して居るのである。

その箇所は驚く勿れ、無慮五十餘ヶ所に渡つて居る。

聯合國陣營の主軸を以て自任する米國は、英、ソ、重慶等の各與國に對し、武器軍需品を供給すると共に、昨十六年十月、アイスランドへの出兵を皮切りに、大東亞戰勃發後は、濠洲及東南諸島嶼、中南米の各地を始め、英國本土は元より北アイルランド、アフリカの北阿、中阿、西阿に於ける各國の領土、西部亞細亞のイラン、イラク、シリヤ、ベルシヤ灣の各方面、夫れから印度、重慶等、世界五十餘ヶ所の諸要地に公然、米國遠征軍の派遣を續けつゝあるのである。

ルーズベルト大統領は現在海外各地に派遣した總兵力は、前大戰の最初の九ヶ

月間に於ける遠征軍の三倍に達してゐると發表し、尙ほ十月六日には陸軍省ロバート、ギム、スハーグ大佐の名でボストン放送局から公然發表して

『米國海外派遣軍は既に六十萬に達し、明一九四三年には一大攻勢に轉ずる、米陸軍は現有四百萬にして逐次増加中にある、又米將兵滿載の船舶は毎日米本國を出發し世界各地の戰場に向ひつゝある』と揚言してゐる。

實際その軍備の擴充進展に伴ひ、漸次増強しつゝあるのであつて、十月廿七日米國參謀總長ジョージ、マーシャルの言明にて海外派遣軍の總力兵は八十萬に達したることを明らかにした。申す迄もなくこの遠征軍の派遣は、政治、經濟、軍事の援助と稱してゐるが、實は米國の世界征覇の野望の實現準備に外ならぬのである。

大東亞戰勃發直後の十二月十三日に議會に於て、米國陸軍の海外派遣案が成立すると、英國本土へ米國軍増派は公然と行はるゝに到り（最も極秘裡には、その

半年も前から英國には軍隊を派遣して居つた）特に米陸軍切つての機械化部隊の専門家である、元作戰部長アイゼンバワーが總司令官として乗り込んだことは、米國の決意の相當堅い事を示唆してゐる。

然して、その作戰目標は、過般、ルーズヴェルト、チャーチル會談で「ドイツ打倒」を對樞軸戰略の現段階に於ける主要目標とする旨強調されてゐるが、米軍の對英派遣の意圖の裏には、英本土を米國の第四十九州化せんとする、思ひ上つた野心が底流をなして居ることは否定出來ない。

處が、この十一月八日未明佛領西アフリカに、不法進軍した米軍の總司令官には、この知名なマイゼンバワー將軍が改めて任命されたと傳へられる。吾々は西阿に於ける米軍爾後の作戰振りを一段と注意して見守ることにしよう。

中南米方面では、アルゼンチン及びチリ兩國が、對樞軸への參戰に關する米國の勸誘を一蹴した結果、一寸出鼻をくちかれた姿ではあるが、米國は既にパナマ運河とカリブ海防衛、及びヴェネズエラの石油輸送ルート保護の爲、パナマ、

ボンジュラス其他中米諸國へ相當軍隊を派遣して居り、メキシコに對しては、米墨共同防衛同盟に基く米軍通過の自由を獲得すると共に、汎米運送道路の建設を急いで居る。

更に蘭領ギアナにも、ボーキサイド鑛山保護の名目で派兵した外、カリブ海の蘭領諸島にも相當の部隊を派遣し、事實上占領して居る。

南米の太平洋方面では、海軍根據地として、必要の戰略地點である、エクアドル領のガラバゴスをも占領して、海軍基地を建設してゐるし、ブラジルには八月既に一千名の軍隊を派遣したと報ぜられる。

アフリカ方面では、エリトリアを中心として、最初エチオプの英國軍援助の目的で兵を送り、又伊國軍の退却後に、マッサワ港を占領し、その浮ドックを手に入れて、これを海軍基地として大いに重要性を持たせて居り、西中亞細亞及び印度に於ける米軍に對する補給輸送の據點として、アフリカ第一の米軍根據地と云へるであらう。

西阿方面では、佛國委任統治領カメルン、赤道アフリカのドゴール派の勢力下地域を中心として、あちこちに米國軍隊を派遣してゐる。

尙ほ、同地方で米國の最も垂涎措かざるものは米大陸と最短距離にある佛領ダカールであつて、これがブラジル東端ナタールから、大西洋横斷の最短距離であるから、これを侵略する前提の工作として、ベルギー領のコンゴ、黑人共和國等に軍隊を派遣して併呑の準備をして居る。

西アジア方面では、これはイラン、イラク方面に、米國軍隊は相當に増遣され英國がエチオプ方面に、兵を移した後に備へると同時に、獨逸がコーカサス方面から顔を出すのへ、相當手配して居る様子が見える。

大東亞の方は、ヒリッピン陥落後は、濠洲、ニュージラランドを米派遣軍の主要據點として太平洋作戦上特に重大視し、先づ自國の出店として兵力を維持するの要を認め、米海軍特に大空軍を送つて居るのが實狀である、實際この方面は我が作戦にも大に注意を要する。

印度には、陸軍の外相當空軍も派遣してをり、重慶には可なり有力な空軍が配されてをる。

英國始め、聯合與國が、米國のこの野望を知つては居るが、當面、米國の經濟力、軍事力に頼らねばならぬと云ふ矛盾があるから、米國の意圖のまゝに、寧ろ喜んで、米軍を迎へて居るが、米國の方は、大戰の規模が餘りに廣汎であり、かつ戦争のテンポが早いので、米國の海外派遣の要否や緩急や方策等は少しも順序が立てをらず、頗る拙速主義で當を失してをる處もある。

事實、米英は、今日の戦争で敗けて居るとは思つて居らぬ、結局最後の勝利は自分の側で戦ひ取ると云ふのが彼等國民の常識であつて、益々戦備の充實を整備しつゝあるのである。

最近英國が、マダガスカルに再遠征を企て、印度洋の西の部分に於ける海上權をその手に確保し、爾後の作戦を有利に導こうと努めて居り、米國は、大西洋米國沿岸の佛領諸島や、中南アフリカの各所に續々と、陸兵の派遣上陸をやつて居

るのである。

又、チャーチルが露都にスターリンを訪問する際にはルーズヴェルトは、特派使節として腹心のハリマンを急派し一所にスターリンと會談させるかと思ふと、今度は又曩の日の選舉に、堂々ルーズヴェルトと大統領を争つた、反對黨の首領ウイルキイを特派使節として、トルコ、ソ聯、エチプト、イラン、イラク、蔣介石迄も歴訪狂奔させて居る如き、國際的情勢を味方に有利に展開せんとする努力は洵に至れり盡せりであつて、彼等が如何に執拗に最後の勝利を目指して、その身構へを練りつゝあるかを推すべきである。

一方佛國やスペインやトルコ等がとうに、獨伊樞軸側に立つべくして今尙、中立を守つてをるのは、要するに米國の外交活躍が、その裏面に大にものを云つてをる爲であらうが、誰の眼にも餘りにも不自然の姿と見られてをつた。

處が國際法の條規や、中立尊重の義務など、全く眼中にない米英は、豫てから潜在計畫準備中であつたと見え、この十一月八日の未明に突然佛領西アフリカの

モロッコ及びアルゼリヤ各地に陸海空軍を以て大舉急襲上陸を決行した。最近佛國は大西洋のマルチニツク群島と、南太平洋のニューカレドニアとは米國に奪はれ、印度洋のマダガスカル島は、英國の不法侵入を被つたにも拘はらず、隱忍に隱忍を重ね泣寝入りの儘過ごし來つたので、米英側では全く佛國を甘く見て、そのアフリカの大領土に迄手を附けた次第である。

佛國に取つては實に寢耳に水の大衝動で、流石さすがの佛國も遂に勘忍袋の緒を切つて、決然米國に對し國交斷絶を通牒し、獨伊と全面的に協力を實行することになつたのは、固より當然の話である。

この急變に對處して、獨伊は疾風迅雷的に發動し、地中海沿岸一帶の佛國要地の警備を完了せるのみならず、樞軸空軍並に空輸による軍隊の、チユーニユス派遣も活潑に行はれ、海上各方面に於ける樞軸潜水艦等の活躍、亦た耳そなたを聳たしむるものがある。

米英今回の夜盜的侵入は、最初こそ一應の成功を見ることありとしても、その



後方海上補給の困難もあり、戦局は必らずしも米英に有利なりとせず、戦勢の赴むく處、或はこの邊の局面から、この大戦を運命づける米英側の破綻が萌し來るのではなからうか。

更に驚くべきは今回の米英軍北阿侵攻に關する、米國側の陰險極まる裏面工作であつて、端なくもウイッシー政府警察の入手した文書に依つて、痛快にも素破抜かれたことである。即ち駐佛米國武官の本國政府に宛てた報告書が押收されたのであつて、十一月十二日夜公表された該報告書の内容は

「佛國民は米軍の先に行つた、リベリア共和國進駐に多大の不安を持ちつゝ、あるが、アフリカ主要部を平靜の裡に占據する爲には、直に重大なる措置を採る必要がある。

アフリカは聯合軍に取つても歐洲攻撃の爲の唯一の基地であり、更に戦後に於ける米國に取りては經濟的制覇の基點である。

而して佛國に於ける反英米傾向を抑壓する爲には、佛新聞を買収するに限る、

若し佛側新聞が之を拒絶したならば、その新聞は獨逸側より金を受けてゐる、第五列だとの非難材料をこしらへて振り蒔けばよい、米國は佛新聞を買収することに依て、佛國民の輿論の硬化を來すことなしに佛領北アフリカ諸地域に進駐し得ると考へる。」云々

米國の仕事の上の惡辣さが目に見える様である。蓋し米國の野望はどこ迄手を延ばそうと云ふのか全く際限がない。由來世界第一は米國人の癖だが、世界第一主義の理想が嵩じて、果ては世界を支配し、之に君臨し號令しようとする野望を持つに至つては到底許し難い。

然し乍ら、これを大局から眺めて見ると、こゝが即ち米國の作戰上の大錯誤であると私は確信するものである。

實際世界を股にかけての大戦争であり、全面積の十分の七は海である所の地球の表面で、廣袤幾千海里に渉る戰略要地を挾んで、彼此入り亂れての頗る複雑多岐な對戦であつてみれば、結局は世界海上の交通上の死活問題から海上制壓と船

腹との、遣り取りが、物を云つて、最後の勝利が定まるのではないかと思ふ。

米國は由來、絶大の生産力と、その自國內の豊富なる物資が強味であつて、船腹の減少如何は必ずしも、米國には死活問題ではないと云ふが、常識の見方であつた。

もと／＼米國は頗る高度の自給自足の國柄であつて、海外から輸入に依存する度合は比較的薄い、昭和十一年（支那事變勃發前年）一ヶ年間の海上輸入量を例に取て見ても日本の二七九〇萬噸、獨逸の三〇四〇萬噸、英國の七一五〇萬噸、佛國の三七二〇萬噸に比し、彼の米國の大を以てして、僅に三五七〇萬噸に過ぎない實情であつた。

成る程、米國として大東亞戦争勃發によりゴム、錫、マンガ生糸等の重要品には事缺くに至つたが、その他の重要輸入品は、仕入先轉換乃至消費節約によつて必しもさして不自由はないと推せられる。

従つてその絶對所要船腹も比較的少量にて足るのであり、船腹問題は矢張り援

英關係にあると見られて居つたのである、處が現在の米國の遣り方からすると、自分の世界的野望に魅せられて餘りに海外に手をひろげ過ぎて、自分で弱點を作つてしまつたと見るべきであつて、ルーズヴェルトの己惚が、米國を亡ぼすと謂はれる所以ではないか。

即ち、船腹戰窮極の結果は、英國の滅亡となり、米國は戰爭繼續不能に陥るのみならず、米國の海外に對する實兵力を以つてする、所謂軍事的投資は後援が續かず、退路は切斷され、世界各方面に派遣された大兵軍は、空しく見殺しにする外、施すべき手はなくなつてしまひ無慘な最期に終るのではないか、けだし、悲劇中の悲劇に終らなければ彼等の幸福である。

太平洋海戦の様相

航空機の驚嘆すべき進歩發達が、攻撃兵器として決定的威力を逞ふするに至つたので、近代海戦の様相は頓に一大變革を來たした。

從來の海戦の最終目標は、敵海上兵力の撃破、特に敵主力艦隊の撃滅による制海權の獲得行使を本筋としたものであつて、日清戦役に於ける黄海々戦、日露戦役に於ける日本海々戦、第一次世界大戦に於けるジエットランド海戦等、何れもその勝敗によつて、その戦争の目鼻が付いたのであつた。

即ち、主力の決戦に於て一と度び惨敗を喫すれば、五年や十年では有力艦隊の再建は思ひも寄らず、敗者の泣寝入りの外なかつたのである。

第一次世界大戦以來、航空機は有力なる戰鬪兵力となつたが、大東亞戰勃發迄は、航空機は主力戰の補助兵力に過ぎなかつた、現に米國海軍に於ても「制空權下の主力艦隊決戦」と云ふのが、彼等の唯一主要戦法であつたが、愈々この戦争となつて見ると、戦ひの推移と共に制空權が絶對なものになつて、航空母艦第一主義に移り、更に航空基地の活用と云ふ問題が登場して來たのである。

然かも航空機は、戦艦などの場合と異り、一旦潰滅されても短時日に生産補充を可能とする兵力であり、その兵力の再起三起を可能とする所に、近代海戦の新

しき様相があるのである。夫れに何んと云つても、海戦の區域が、何千何萬キロと云ふ廣大無邊に擴がり、大遠距離となつて來たので、制空權の獲得には、どうしても航空兵力を中心とする航空母艦群と、基地航空隊とを切要とする様になつたのは固より其處であるが、殊にその眞價を最上に發揮するのは、基地航空隊であつて、その威力は正に壓倒的なものとなつて來た。

今日では航空機の前には、海上兵力の安全な隠れ場は絶無となり、難攻不落の防禦港灣でも、その在泊艦船は味方航空機で防衛する外に手段がないのである、眞珠灣の空襲戦はその適例である。

兎に角、航空機の發達は、海上に於ける基地島嶼の價値、威力を増大し、今日ではこの基地を擴張して順次敵の戰略要點を占據し、以て敵の急所を制するのが一番有利であつて、これ等航空基地が中心となつて、陸海空戦が行はれる様になつた。その典型的な實例が第一次ソロモン海戦に始まつて、今も尙ほ引續き執拗に血戦死闘が展開されてをる、之れこそ近代海戦獨特の様相である。

航空基地の持つ威力は、一般的に云へば、不動不沈の航空母艦であり、又勢力絶倫の砲臺である。そこから發射する砲彈でも、魚雷でも、航空機が自分で抱へて、之を大遠距離にある敵の頭上に運び、百發百中とも云ふべき、精確なる攻撃を實行するのであるから、相手に取つて之れ程厄介なものはないのである。

従つて、この航空基地の爭奪が基となつて、必死の海戦が行はれるのも當然な話であつて、現下のガダルカナル島爭奪戦こそは、太平洋のスターリンググランド攻防戦だと喝破した、海軍報道部の富永少佐の一言は、眞に適評である。

従來の大海戦と違つて、航空機を主體としての海戦は、云はばその局面限りの決戦であつて、その戦果は極めて重要であるが、直に大局の上の勝敗と云ふ譯には行かない。

ハワイ海戦から、ソロモン海戦、最近のルンガ沖夜戦に至る迄、幾多華々しき決戦が行はれ、我海軍が絶大の戦果を擧げて居り、夫れが大局の戦勢の上に、非常にも有利有效な影響を與へて居るのであるが、敵の航空機は、あとからあとから

と生産輸送し來るのであり、米國の執拗な戰意は容易に挫けないのである。

此處で日本の方が萬一にも、生産負けでもする様なことがあれば、彼等の手は直ちにニューギニヤから、ヒリッピン、内南洋諸島に伸び、忽ち日本本土の總空襲、總爆撃を決行し様と云ふのが、彼れ等唯一の願望であつて、三度や五度の海戦の敗北位では、相手は仲々参つたと云つて弱音を吐く所まで行かないのである。

併しながら、何んと云つても、海上萬里の戦さであつて、單に航空機だけの、撃合ひでは決戦にはならず、彼等に勝目のある筈もない。海上の艦艇殊に戦艦や航空母艦や、巡洋艦驅逐艦などが、一戦毎に大打撃を被つて、海上の戦鬪力を始めとし、海上輸送力や護送兵力が、餘りにも減殺されてしまつては、流石傲岸な米國も、施すに術が無いことになるのであつて、茲に米國の窮極の弱點があるのである。

彼れ等が絶大な生産力に物を云はせて、如何に多量の航空機を作製して戦地に輸送しても、イザ合戦となると、日本相手には全く齒が立たない。之れではいく

ら骨を折つて生産しても終局の勝目はない、考へて見れば洵に馬鹿々々しい限りだ、と云ふ絶望觀に陥らしむるまで、我方は能ふる限り、澤山な航空機と艦艇とを作製建造して、戦さの庭に送り出すと云ふことが、この戦争に勝つ至近最良の途と云へるのであり、之れが今日の銃後國民の最要の御奉公なのである。

勝ち抜く途と「明日の海」

繰り返す様だが、今度の戦争は國民と國民との間の力くらべ、根くらべの戦争であつて、その勝敗は國民の一人一人が、敵國民の一人一人に優つて職域奉公の實を擧げ得た方に軍扇は上がるのである。

それには何としても國民的自覺と國民の團結が必要であるが、さて、その自覺と云ふのが簡單のやうで、なか／＼容易ならぬ問題である。國民一同は今直面して居る時代の實相は百も承知の上で、今日の戦争は、振古未曾有の戦であることは誰も口には云つて居るが、それならば、國民の一人一人が心の底から血の滲む

やうな思索の結果として、此の振古未曾有と云ふ意義を本當に頭に入れて、現實に、その覺悟を持つてその毎日を勵んで居るかどうか。

前にも申す通り、今日我國は、一ヶ年八千萬噸の鐵を産し、一ヶ月五千臺の飛行機を作り、一日に一萬五千噸の船舶を進水し、一時間に六百五十臺の自動車を作つて居た米國と、更に英國、支那を加へたものを敵として戦つて居るのであつて、なみ大抵の戦争ではないのである。

日本は素より神國であり、何と云つても、絶対に負けぬ國である。絶対に負けぬと云ふのは、日本國民自らが、日本を背負つて、神國たる實を現はすことに於て始めて日本が敗けないのである。

こゝが大切で、その神國たる實を現はすと云ふことは、日本國民の總てが、現在の容易ならぬこの事態を認識し、めい／＼の立場立場にあつて、日本國民としての最善を盡し、以て、國家に奉仕することであつて、この日本の國家を神國として、もり上げ、守り通すことに他ならぬのである。

云ひ換へれば、軍人は軍人として、お役人はお役人として、實業家は實業家として、工場従業員は工場従業員として、農民は農民として、婦人は婦人として、何れも、よく皇國今日の實狀を認識し、その立場々々にあつて、自己の最善を盡すと云ふのが、何よりも切要なのである。

戦場に於ける第一線の將兵が、今日、只今も、盡忠報國の熱意に燃え、鮮血に塗れつゝ、何れかの方面で必死の奮闘を續けつゝある事を思ひ、われ／＼銃後の國民も、銘々の立場々々にあつて、自己の犠牲を以て國家を勝利に導くと云ふ日本魂を發揮し、何年戦争が續かうが、物資が缺乏しようが、生活が困難にならうが、經濟が逼迫しようが、屈せず撓まず、勝ち抜くと云ふ大信念、大自信を以て斷乎として押通すのでなければ勝利は得られないのである。

日露戦争中の、明治三十八年一月一日、乃木軍の大奮闘によつて、旅順口は陥落し、露國の東洋艦隊は全滅して、東郷司令長官の率ゐる聯合艦隊は、直ちに内地に廻航し、各軍港に手分けをして、艦隊の總修理を急いたのである。

蓋し、ロゼストウエンスキー司令長官の率ゐるバルチック艦隊は精銳をすぐつて、當時既に佛領馬島—マダガスカル島（今日の大戦に、そのマダガスカル島を日本に奪はれては、西部印度洋の海上權が危いと云ふので、英國のチャーチルは血眼になつて、再度大兵を派遣して同島占領を決行したのである）まで廻航し來つて居り、いつ何時、東洋に向つて出發するか知れない状態であるから、我が艦隊の修理復舊は一日も早く、これを完成して、現地に於ける大砲水雷その他の訓練に取掛らねばならなかつた。

ところが、永い間、戦地に在つた艦隊で、その修理箇所も山の如く、工事日數は如何に急いでも、如何に切り詰めても最少限二ヶ月を要する實狀であつた。

これは當然のことでも何とも致し方はない、とにかく早速修理に取掛つたが、バルチック艦隊撃滅の大責任を肩にする東郷さんの身になつてみれば心中の焦慮は察するに餘りあつた。

修理完成迄二ヶ月は、とても永い氣がする。馬島出發は何時か判らぬが、早目

に出るとしても其の來着迄には修理復舊は、どうにか間に合ふ譯だが、夫れでは修理後の艦隊訓練の時日が殆んど剩せない、これが實に困つたものと、東郷さんが秘かに其の苦衷を洩らされたといふ事が、誰言ふとなく、夫れから夫れへと傳はり、これを耳にした海軍工廠の職工さん達は、修理が遅れた爲に敵を目前に控へて戦さの稽古が出来ないとあつては御國の一大事だ……。

「露助などに負けて堪るものか、おれも日本人だ」よし、これから俺達は寝る時間などはどうでもよい、飯の時間などは無くともよい、是非共豫定の期日の半分で工事を仕上げて見せると、自發的に誰も彼れもが眞黒になつての大奮發、工事は晝夜兼行で運ばれ、鋸の音、ハンマーの響勇ましく、たうとう、一ヶ月で見事に工事を仕上げてしまつた。

東郷さんにとつては、唯だ感激感謝の外ない次第で、艦隊は二月半ばには早くも出動、豫定地點に集合して、銳意訓練に従事することが出来、私も旗艦三笠の砲術長として、所謂百發百中を目指して心行く計りに、射手砲員の訓練にいそし

むことの出来たのは會心の至りであり、魚雷の方は魚雷で、是非共一發必中の域に達すると云ふ努力であつたが、實際には當の敵のバルチック艦隊は三月十五日にマダガスカルを出發五月廿七日に朝鮮海峡に現はれた様な譯で、正味三ヶ月充分に訓練の時日があり、あの日本海大海戦の華々しい勝利ともなつたのである。

この短期日に艦船の大修理を完成した、職工さん達の意氣込と超人的大努力とは、日本海々戦大勝利の蔭に輝いてゐるのである。

一億一心、これであつてこそ今度の戦に勝ち抜く事が出来るのである。

聞くところによると米國では昨今、遊蕩的な樂天氣分が漸次一掃され、朝野舉つて今日のこの戦争の真相を理解する様になり、從來獨逸を眼の敵としてをつたものが「何としても、先づ日本をやつつけて了はねばならぬ、あの戦争上手の日本はいつ何時、その無敵陸海軍を差し向けて、自分達の米國を潰滅してしまふかも知れぬ」

等と、眞面目にラジオ其他で宣傳をして居り、最近には、日本から歸つた駐日

大使グルーが、

「日本の軍事力、經濟力の恐るべきこと！」

を聲を濁らして強調して居り「日本人朝野の意氣込は、必ず華府迄攻め入つて城下の誓をなさしむると、力んで居るから、決して油断はならぬ」

「米國を救ふの途は誰だ日本撃滅あるのみ」

と聲涙共に下るの概を以て國民に訴へ、戦争に對する米國民の覺醒を促して居る。又十月三日、ノックス海軍卿の聲明にも、

「余は布哇が受けた打撃の後を此の眼で見て來た。余は敵國に對し、この何倍かの打撃を與へんとするものである、米國旗が受けた侮辱を報復せんとする我が海軍の不屈の精神を知つて貰ひたい、やがて、此の成果を見る事が出来やう」と國民を激勵して居る。

これには随分宣傳もあらうが、最近の米國は、生れ變つたやうに眞劍になり各軍事工場は、日曜も祭日も抜きにして生産本位の大活動だと傳へられる。

一體、米國民は、その國民性として調子に乗ると、戦争を自分の仕事のやうに全關心を集中し、女子供迄が、自分の國家の前途が——等と、ふりまわして、いつのまにか舉國一致の實を擧げるのであるから油斷はならない。

萬一にも、此の大切な時機に於て、我が日本の工場に於て、給與の増加に伴ひ「今度の戦争は持久戦だ、さう朝から晩迄毎日働き續けるにも及ぶまい、月に二度や三度休んでも給料の方は充分で、暮しにはあり餘る位だから」と云ふ量見で今日は家族連れで映畫を見に行くとか、この次には友達と何處かへハイキングに出掛けやうなど、今日の國家の實狀には、お構ひなしに、自分の収入本位生活本位で、自分勝手に毎日の仕事の勤怠を按配調節する様な手合ひが、一人でもあつたとしたなら國民對國民一人一人の力比べ、根比べである今日の戦争に於ては日本の方が早速黒星をとる次第で、斷じて許し難きところである。

要するに日本と云ふ國家は、この俺が支へて居るのであると云ふ自覺が、吾々國民全體、誰にも彼にも切要で「一人一人が、これ皆な國家の柱であり、従つて

今日の日本を勝ち抜かせるのは此の俺の力であり、この俺の犠牲で、やり遂げるのだ」と云ふ大自覺を國民全體が持たなければならぬ。

この國民銘々の自覺こそ實は億兆一心、舉國團結の基調であり、又、國家を勝利に導く眞の原動力なのである。

かやうにして出來た此の國民の偉大なる團結の力こそ、とりも直さず日本の戦力そのものであつて、意義のある眞の戦力とは即ちこれである。われに此の眞の戦力があれば、米英の屈服は必然であつて、今次大東亞戦の目的も必ずや遂行せられ、東亞恒久の平和を確立すべき吾人の大使命も、輝かしく實現せられるのである。

まことに畏れ多い事であるが、今度の大詔には、畏くも

「朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達スルニ違算ナカラシムルコトヲ期セヨ」

と諭し給ふたのである。私共は此の 聖訓を篤と拜誦することが切要である。

かの日清、日露の戦役に皇軍があの大勝を博した原因は銃前銃後を擧げて、全國民がそれ／＼の本分を盡したからであつて、大東亞戦争に絶對の勝利を收める要諦も、亦た此の一點にある、一つ軍艦の場合を考へてみやう。

軍艦は軍艦それ自體の中に、それ／＼階級職分があり、艦長を初めとして副長航海長、砲術長、水雷長、機關長と云ふ様な士官の職務から砲臺、水雷室、彈藥庫、機關室等に於ける下士官兵に至る迄、皆なそれぞれ職分があり、又は銘々の立場々々があるのである。

これが互に侵すところなく、各々自己の職分を盡す、夫れが自然に綜合團結せられて、死物の軍艦そのものが、勃然として絶大無限の一大活動力を發揮し、非常な働きを爲すのである。

此の團結の力がよく、三萬噸の巨艦が一時間に二十幾哩と云ふ、驚くべき快速力で走らせたり、百噸の大砲を巧に操縦して、三萬米の遠距離を飛ばして十六吋の砲彈を命中させたり、魚雷を水中に放つて、馳り行く敵艦の胸腹に爆撃を加へ

たり、扱ては所要の時機に、所要の兵力を所要の地點に集中すると云ふ必勝的戦略の妙諦を、すらくと實現せしめるのである。

即ち軍艦の乗員、そこには色々の立場はあるが、何れもその現在を樂み現在を勵みその本分を守り、最善の努力を爲すことに於て、軍艦そのもの、勢力は彌が上に向上し偉大なる力となつて敵を撃滅し、皇國を護り、海上制壓の大役を完ふすると云ふ次第なのである。如何に華やかな海戦でも、合戦の實際の狀況を目撃するものは、軍艦乗員が千人ありとすれば、その中の五十人位に過ぎないのである、大部分の者は、敵艦が何隻あるか、彈丸は命中して居るのか、どちらが勝つて居るのか、何もかも皆目判らずに、唯だ銘々の戦闘配置に在つて、或は彈丸を運び、或は罐を焚き、或は油をさし、或は通信をやつて居るのである。

彼等は平常と變らぬ仕事を、最善を盡して、たゞ眞劍にやつてやつて、やり抜いて居るのである。それでその軍艦が最大威力を發揮し、戦ひに勝つのである。乗員の誰も彼もが、合戦の實狀が見たいと云つて、甲板に飛出したり、咽喉がか

わいたと云つて持場を離れたりしたならば、ソノ軍艦はどうなる事であらうか。

日本海大海戦の時、私は旗艦三笠の砲術長として、今も、あり／＼と想ひ起す一つの光景がある、十五輦砲臺の一人の若い水兵が、一心不亂になつて自分の役目である弾丸こめの作業をやつて居た、彼の頭の中には、弾丸をこめること以外には何ももないのだ、射撃目標が何か、見えもしないし、考へもしない、その水兵が、突然自分の懐中から、お守を取り出したかと思ふと、夫れを手に持つて居る弾丸にベタリと貼つて、その弾丸を一生懸命に拜んでゐるのだ。

「どうか命中してくれ、それは母さんから送つて来たお守りさんだ、靈驗あらたかだぞ、當つてくれ、どうか當つてくれ！」

と自己の本分に徹し切つた者の崇高無比な姿であつた。

この姿こそ、即ち、現下國民總ての姿である事を私は信じ、且つ念じて居る。

かくてこそ、明日の世界の海は八紘爲宇の御稜威の下に、永劫の平和と幸福が招來されるのである。人類は始めて恒久の光榮に浴するのである。

日本の母

日本民族の力の源泉

大東亞戦争開始以來、我が軍は陸に、海に連戦連勝、その間に於ける皇軍將兵の、一死報國、盡忠無比の奮戦振りには、吾々國民は、全く頭が下がるのであつて、感激の涙、潜然として禁じ難きものがあるのである。

惟ふに皇軍の世界無比の精強さは、決して單に、學校教育や、社會教育等にのみ因るものではなく、日本の母が強いからだと言はざるを得ぬのであつて、實に母こそ日本民族の力の源泉であると斷じたい。

母の根本精神は、滅私の精神であつて、子供の爲、子供の將來の爲には、自分の總てを捧げる處にある。日本の母親の献身的な態度、子供の爲には全部を捧げ盡す態度、生活そのものが子供の爲にあると云ふ態度、これは軍人が戦場で、そ

の全部を捧げ盡す態度と些かも變りはなく、理窟以上のものである。

更に又、この母の滅私精神が、結局戰場に於ける將兵の君國の爲に、自分の全部を捧げると云ふ精神の根本であるとも云へよう。

此の母の心持に一步を進めて、自分の生んだ子供は、實は國家の子供であり、陛下の赤子であるのだ、子供は君國に全身を捧げるのが全く本筋であると云ふ母としての悟りを聞いて、自分の子である、第一線の兵隊さんを勵して、益々強くならしめる母もあるのである。

いづれにしても日本の母性の力は、世界にも比類のないもので、國家の本當の基は、社會の表面に出ない、蔭にかくれた母性にこそ宿つてをると、つくづく考へさせられる。

日蓮上人の言葉に

「矢の走るは弓の力なり、男の業は女の力なり」

とあり、所謂巖をも通す梓弓で、虎と見て石に立つ矢のその凄じき力の根元は

弓にあると同じく、非常なる功績をなし遂げる男子の背後には、眼に見えない偉大なる女の力が、潜んでをることを忘れてはならないのである。

我等日本の偉大なる女性は、近世、西洋の文化の女性と著しく其の選を異にし一向、名は現はれないが、眞の日本の崇高にして偉大なる姿は、この無名の女性に依つて、哺育確保されて居るのだと云ひたいのである。

大東亞戦下其の實例は、いくらもあつて、吾人の眼前に供せられて居るのである。若しそれ、早く夫を亡ひ、陋巷にあつて、行商の業に従ひ、力弱き女の細腕に、親しく手をひき背に負ひつゝ、手鹽にかけて育て上げたその男の子を三人迄も、君國に捧げて、しかも健氣にも、謹みて國家の援護を辭し、依然として貧しき行商の辛苦によつて、尙殘る年若き末の男の子を國家に捧げんと、刻苦養育しつゝある無名の日本の母を思ふても見よ！話を聞いた丈けでもひし／＼と胸を打たるゝではないか。

日本の無名の母は、實に日本の崇高偉大なる力の源泉である。

さて又、戦場に勇戦奮闘致命の戦傷のいまはの際に、天皇陛下萬歳と叫んだその後は、潜に母の面影を臉の中に浮べて、母の愛の中に相抱かれて、安らかに瞑目する幾多の將兵が眼の前に見える様にも覺える。

戦場ではないが、嘗て昭和十三年の春、佐世保港外で演習中に沈没した第四十三號潜水艦を引上げた後の艦内調査で見ると、若い水兵が死期迫り、呼吸困難の中に於て、鐵釘の先端で、鐵壁に

『お母さん』

と書き遺したのも、今尙ほ忘れ難い印象であるが、今度の大戦の立ち上りのハワイ空襲の際、機上の若い一大尉がハワイ軍港の眞上まうへに迫りつゝ、密雲に包まれて茫乎たる気分であつたが、ふと眼前に、母の姿を見、しかも神前に額く母の姿が現はれたかと思ふと、心氣遽に一轉して清爽となり、心眼が開けて、敵状も手にとるやうに明瞭となり、極めて沈着の態度を以て、悠々敵防禦砲火の彈幕に突入し、效果ある襲撃を決行したと語つて居る。

母の魂は、その子の蔭身に添うて、戦場に飛び、死に到る迄、その子を激勵して居るのではないかと思はれる。

チャーチルの母とチャンバレンの母

實際女性の日本人らしい日常生活が、日本の眞の力になつてゐるのであつて、銃後の女性が老も若きも、よく戦争の眞意義を自覺し、本當の日本人らしい立派な母親、申分のない女性として、日々の御奉公を致されるその事が取りもなをさず絶大な日本の戦力であり、戦勝の土臺を築くのである。

日本の此の母に對して、英米の母は如何であるか？

一體、歐米の家庭は夫婦本位で、子供は、寧ろ手足纏ひの様に扱はれ、大體に於て構はずに放任して置くのが、常識になつてをり、中流以上の家庭では、或は乳母任せにするか、或は家庭教師乃至學校に依頼し放しか、兎に角自分達だけが子供の系累を離れて、思ふがまゝに、享樂の生活に耽つて居るのである。

随つて、親子の愛情、殊に母子の情愛は、通り一遍で、到底日本のやうな母子が生命をかけて、相結ぶ熱烈な情趣は、薬にしたくもないのである。

現に今の英國の首相ウインストン・チャーチルが、初めて内閣に列して大臣となつたのは、明治三十九年の正月、サー・キャンベル・バンナーマンの自由党内閣であつたと記憶する。當時、私も丁度ロンドンに居合せて、記憶してをるが、何しろ若手のロイド、デオージと、かぞへ年三十一歳になつたばかりのチャーチルとが、新内閣中での青年大臣の双壁と唄はれ、大した評判であつた。

ウインストン、チャーチルの母親、即ち父のランドルフ・チャーチルの妻君は米國生れの婦人であつて、ランドルフ・チャーチルは、大臣として内閣に列した人でもあるが、其人が亡くなると子供のチャーチルなどは置いてけぼりにして、間もなく辯護士か何かに再縁してしまつた。

ところが自分の生んだ子のウインストン・チャーチルが今度内閣大臣になつたと云ふので、その母親は躍り上つての大喜び、現在の亭主などそつちのけでウイ

ンストン・チャーチルの手を曳いて、先夫ランドルフ・チャーチルの御墓詣りをするやら、チャーチル大臣に對する祝賀會などであると、眞つ先きに顔出して自分天下の御シヤベリをするやら、大ハシヤギで盛んに當時の新聞界を賑はしたものであつた。日本では一寸見られない圖である。

ウインストン・チャーチルの前の英國首相は、矢張り保守黨ネビル・チャンバレンだが、此の人の長兄は有名なオーステン・チャンバレンで二十五歳で内務大臣となつた評判の男であり、臣下としては殆んど前例のないガーター勳章を賜はり、幾度か内閣大臣の椅子を占めた知名の政治家であるが、此のオーステン・チャンバレンの嫁を探すとて其の父のデョセフ・チャンバレンは米國へ渡つた。

此のデョセフ・チャンバレンは、ソルスベリー内閣で永く殖民大臣を勤めた人で、南阿戰爭を惹起し、南阿に強壓政策を執つた有名な辣腕家である。さて、子息の嫁探しに、米國へ渡り、適當な娘をみつけて連れて來たが、如何なる譯か此の老デョセフ・チャンバレンは、その子息の嫁の候補者と自分が結婚してしまつた。

さて、デヨセフ・チャンバレン夫人となつた米國の女性はその後老チャンバレンが中氣になつて、乳母車に乗つて運動する傍らに若い綺麗な夫人の付添つた寫眞が、よく當時の新聞などに出てをつたが、聽て老チャンバレンが亡くなると、繼子のオーステンとネビルと二人の子息などには關つてもをらず、忽ち牧師と再婚してしまつた。

それから大東亞戦争の始まる迄、東京に駐在して居たクレイギー英國大使の母親は、米國人か英國人か聞き落したが父親が亡くなると、直ぐ海軍大將のチュールドルに再嫁した。そして、クレイギー大使が、新たに日本へ赴任し來た時には、現夫チュールドル大將から日本の知人に向つて、

「今度大使になつて日本に赴任するクレイギーは自分の今の妻の先夫の子であるが、未だ若い未熟者であるから何分頼む」

との書面が届いたと聞いて居る。

ところで、茲に今一つ英國の母の性質を最もよく語つて居る話を附加しよう。

それはダンダス海軍大將の家庭のことである。

ダンダス海軍大將は、大佐時代に大使館附武官として日本に在勤したこともあり、英帝の即位戴冠式に東郷元帥が英國へ行かれた際には、接待役として終始元帥に御供をされた人で、スコットランドの豪族出であり、スコットランドの首府エデンバラ郊外にダンダス城と云ふ宏大な立派な城も持つて居る人で、東郷元帥を招待し、此のダンダス城で晩餐會を催されたこともあり、私もその城に招かれたこともあつた。

このダンダス大將は、第一次大戦後亡くなつた。すると、その夫人は、もはや嫁に往かうと云ふ年頃の娘を始め、四五人の子女があり、そのやうな豪族で、城もあるにも拘らず、海軍中佐のところへ再縁してしまつた。どうも、之れ等の夫人の心持が了解出来ない、詰り思想が根本から違つて居て、子供の事を考へるよりも先づ自分自身の幸福、否な享樂の事を第一要件とする爲めであらうが、子供の不幸は洵に云ふに忍びないものがある。

ベトナム大將悲痛な告白

この事に關して、英國のベトナム海軍大將の逸話がある。

ベトナム大將は、日露戦役の時に、大使館附武官として、日本に在勤し大の日本最負で、日本の武士道に就て深く研究信仰する所があつた。聯合艦隊にも從軍して日本海々戦の経験もあり、その實戦上の意見は、英國海軍省に於ても特に重要視せられ、ドレッドノート第一世（巨砲戦艦）の建造も、このベトナム大將の進言が土臺となつたと云ふ位で一とかどの人物であつた。前世界大戦の時には、少將でビーチー司令長官の麾下に巡洋艦戦隊司令官であつたが、自分の戦隊だけは時計を進めていつも他より一時間だけ早く仕事に就いたと云ふ人物。

私は當時ビーチー艦隊の戦艦クキン・メリーに乗艦中であつて、或る日艦隊がロサイス軍港在泊中に、ベトナム司令官の旗艦に午餐に招かれたことがあつた。午餐は午前十一時で、同戦隊では公私共、時計は悉く一時間づゝ進めてあつたの

である。つまり、ベトナム戦隊では朝は一時間早く起き、夜は一時間早く寝る、晝めしも十一時に食ふと云ふ様になつて居たのだ。

夫れに就て、ベトナム司令官は自分に向つて云つた。

「此の巡洋戦隊のやうな戦闘力の微弱な速力の遅い隊は、いざと云ふ場合に人を以て少しでもその活動力を補ふ外ないので、普段からその準備をしてをるのである。

殊に、戦と云ふものは、夕刻よりも天明時が一番大切である。だから、常に隊の時計を一時間早めて、以て急變に應ずる訓練を爲すのである。

他日、敵が現はれた時、他に先んじて、第一に出動するものは、必ず我が巡洋艦戦隊であることを記憶されたい。

尙、我が戦隊の如き舊式劣勢のものは、たとひ全滅しても、合戦の大勢上に何等影響を及ぼすものではないから、對敵の場合は、一に我が主力艦隊を有利ならしむる爲め、我が戦隊を犠牲にして思ひ切つた活動を斷行する決心である。

これに就いては、日露戦役の八月十日の海戦に、山田彦八（少將）司令官が鎮遠の如き舊式の艦隊を率ゐて、主力艦隊を有利にする爲、斷乎對敵行動をされた其の措置に深く敬服し、それを學ばんとするものであり、自分は秘かに期するところがある」

と眉をあげて語つた。

ベトナム司令官は、碇泊中は四時半に起床し、五時半には朝食を済まし、少閑があつても他の將兵の様に決して陸地を踏まず、艦尾の將官室は定員外兵員の住居に開放して、自分は艦橋下の極めて小さい室に起臥すると云ふ風で、英國人には珍らしく、大戦争終る迄は土を踏まぬと云つた全く日本の古武士のやうな風格があつて、誰云ふとなく、日本人からは英國の『乃木大將』と云はれ、その態度容貌も、何んとなく乃木さんに似て居つた。

此のベトナム大將は家柄もよく資産もあり、人柄もよかつたが、どう云ふものか一生涯無妻で通した。

後年私が、高松宮殿下の英國皇室御訪問のお供をして、彼地に參つた時も、ベトナム大將は、まだ無妻であつた。何しろ、當時は、第一次歐洲大戦後で、望み通りの女性は、いくらでもある時であるから、私は、どうして結婚しないのかと尋ねた。

と、ベトナム大將は

「仰せの通り、よい婦人は澤山ある、しかし自分は結婚しようとは思はぬ、その理由は、英國の婦人にも、實際よいのがあるから結婚しても、確に幸福な生活が送られると思ふが、自分の死後はその妻は譬へ子供があつても、それには構はず、必ず他に再縁するに定まつて居る、子供の前途を考へると可哀想で自分一個の幸福の爲に結婚することは到底忍びない處である、だから、一生涯獨身で通すのである！」

何と、自國の婦人即ち英國の母に絶望した、斷腸悲痛な告白ではないか。

二代三代の忠臣は母の賜物

噫！、世に日本の母程有難いものはあるまい、殊に早く其の父を亡つて、この日本の母の手一つで養育される子供に取りては、同じ境遇にある世界の何れの國の子供よりも最も幸福であるのである、實際其の子の爲には全身全靈を捧げ盡して、ひたすら努力奮闘し、如何なる困苦艱難も踏み越えて、立派な人間に成育すると云ふのは、獨り當人である子供の幸福のみに止まらず、亡き父も安心して瞑目し得るのであり、第一線に於ける將兵も毫も後顧の心残りもなく、勇んで死地に就くことが出来るのである。

我が日本には、忠臣が二代、三代と續く。大楠公が湊川で壯絶な死を遂げられた後の、正行は僅かに十一歳、夫れが立派な武將としての成育とその活動が、足利方をして常に憂慮恐怖せしめたのであり、北畠親房卿の子顯家も、父の跡を繼いで大いに吉野朝に忠節を盡し、屢々強敵を震駭せしめた。

又九州に於ける孤軍奮闘の菊池武時も、武光の遺兒であり、父の死後、菊池勤王の旗幟は、いよく揚つた如き、皆これ悉く其の母の没すべからざる苦節十年の賜物である。

父なき後に、永い年月に渡つて、その子を父の生前より以上に、立派に育てあげ父の遺志を繼がしめる、その母の献身的の精神の例證は、我が歴史の上にも將た又、現に戦はれてをる大東亞戰に於ても枚舉に遑ないのであるが、私はその最もよい一つの例として、軍神加藤建夫少將の母を挙げたいのである。

加藤少將の父君が日露戰役の時、乃木軍に従つて奉天會戰に、名譽の戰死をされた時は、建夫少年は僅かに二歳であつた。それから以來、春風秋雨幾十年の月日を重ねての母の愛撫養育、到底筆紙に現はし難い、千辛萬苦が酬ひられて、今日其の子が日本の軍神として、吾れ人共に仰ぐに至つたのも決して偶然に非らずであつて、全く母の誠の結晶である。

又、日露戰役に、旅順口閉塞の大快舉に参加し、軍神廣瀬中佐から幾度か、そ

の名を呼ばれて遂に還らず、壯絶なる戦死を遂げられた杉野兵曹長、その遺児は長は修一氏、次は建二氏、共に今日では或は海軍大佐として、或は海軍中佐として、立派に無敵海軍の將たるに至り、父君と同じく國家の爲に、第一線で今現に奮戦しつつあることは、父亡き後母の手一つで育てあげた、母の偉大なる力の賜物である。

これを思ふにつけても、英米の母なるものが父が没すれば、その子女を顧みず直に第二の夫を求めて他に嫁し、自分だけ享樂的な、幸福的な感情に浸りつつあるに比して、我國の母と餘りにも思想が、かけ離れて問題にならぬ處に、今日の戦場に於ける勝敗が、あり／＼と實證を示して居るのであらうか。

故人 今人

小村壽太郎大使の眞骨頂

明治四十年の初夏の事であつた。

伏見宮貞愛親王殿下（現伏見大宮殿下の御父君殿下）には、曩に英國皇帝が、明治大帝にガーター最高勳章を贈呈遊ばされるため、コンノート殿下を御差遣に相成つた、その御答禮の爲に、御名代として御渡英遊ばされたのであつた。

その時の随員は陸軍の方では西寛二郎大將、松石安治大佐（故中將）それに東乙彦少佐（後の中將）等で、海軍側では前海軍大臣であつた山本權兵衛大將、財部彪大佐（後の大將）加藤寛治中佐（故大將）等であつた。

當時、ロンドンには前外務大臣だつた、小村壽太郎伯が大使として居られ、大使館附武官として陸軍では柴五郎大佐（後の大將）海軍では枅内曾次郎大佐（故

大將)が居た、自分は中佐で駐在武官としてロンドンに居つた。

御名代の伏見宮殿下を御迎へする爲には、英國當局では實に非常な苦心で極めて鄭重に準備した、そして、特に、當時ロンドンで流行して居た『みかど』と云ふ芝居の興行迄を禁止した。

この『みかど』と云ふ芝居は一寸日本人を侮辱した様な場面があり、日本人が見ては頗る不愉快なものであつた。

尤も、此の芝居の音楽は素的に良いと云ふので、これは亦た英國の上下社會に大流行であつたが、英國の宮内省は、この音楽迄も禁止したので、ロンドン人はこれを大層遺憾に思つてゐた。

さて、御名代の宮殿下の御一行は、恙なく御到着、バッキンガム宮殿の公式の御儀式や、宮中の大祝宴を始めとし、各地に於ける種々の催しや大歓迎の行事も萬事滞りなく相濟んだのであつた。

すると、其處へ伊集院五郎中將の率ゐる筑波、千歳が、遣米艦隊としての歸途

英國へ立寄つたのである。

この筑波は最新式の高速度戦艦で、日露戦争中から日本で計畫建造され、當時世界の視聽を集めて居たものであつて、後に世界の巡洋戦艦の嚆矢となつたものだつた。これが、千歳と共に北米バージニア州バンブートンロードで行はれた萬國陸海軍祝典に參列して、大に國威を發揚しての歸りに、此の年六月始め、テームス河口のチャタム軍港に入港したのであつた。

軍艦旗堂々、チャタムに入港した、此の艦隊の旗艦筑波で其の晚奏した音楽が問題なのであつた。樂長は『守るも攻むるもくろがねの』の軍艦行進曲や御馴染の愛國行進曲で有名な、彼の瀬戸口藤吉氏であつたと思ふが、此の軍樂隊が何氣なく奏した曲が、何と英國の宮内省では、御名代宮殿下御歡待の爲に禁止した『みかど』の音楽だつたのである。

これを聞いた英國側では驚いた。その時のチャタム鎮守府司令長官は、嘗つては東洋艦隊の司令長官として、日本へも來たことのある親日派のノーウエル大將

で、英國海軍部内では衝角戦術の權威者と唄はれた豪傑肌の將軍であつた。

このノーウエル大將、日本の旗艦から聞えた音楽が問題の『みかど』と知るとすぐさま、麾下の艦船や、海兵團に『みかど』の奏樂を許可して、大いに、やらせた。

勿論ロンドンへはその日の内に傳はつた。とロンドン人や新聞では『みかど』の様なよい音楽は誰も好むのであつて、現に日本の軍艦でも奏するではないか、何も之を禁止せんでもと自然苦情や厭味も出て宮内省にも當るのであつた。

さあ、困つたのは當の宮内省で、大弱りに弱つて、それとなく日本の大使館に縋つて見た。

「英國の宮内省が、今度の御名代宮殿下をお迎へする爲に、總ての方面に亘つて心を配られ特に『みかど』の芝居や、その音楽を止めて迄、十全の意を拂はれたことは、日本として特に感謝する處である、もはや公式御訪問も御濟の今日であり『みかど』の芝居、その音楽の禁止を解いて頂きたい」

と云つた様な意味の挨拶でも日本大使からして頂ければ、宮内省の面目も立つて非常に好都合だと、持ちかけたのであつた。

一寸御尤もの様であるが、云はば宮内省の失策を日本の方で引受け、剩つさへ内政干渉がましき印象を英國民に與へることは免れない。

ところが、小村壽太郎大使は

「そんなことは大使のする事ではない！」

と、一言の下に、はねつけてしまつたのである。

そも／＼小村壽太郎大使こそは、嘗つて日英同盟を締結した時の、當の外務大臣であつたし、日露戦争中の色々のことや、今後の日英關係等から考へて、英國の方では、何とか色よい返事があつてもよいと、期待して居たかも知れない。

しかし、其處が小村さんの小村さんたるところで、筋道が違つた事は、誰が何と云つても、頑として聞かれなかつたのである。所謂

『富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず』

で、小村さんの眞骨頂は、此の觀點から、眼中、英國無し！の慨があつた。後年、私が、ロンドン大使館附武官であつた大正二年頃、當時の井上勝之助大使から、これは親しく聞いた話だが、英國では、毎年ロンドンで、各國大使と其の家族を四五組宛、キングスゲスト（皇帝のお客）として、ウインザー離宮へ招待して數日を過すのを吉例とされて居るのであつて、現に大正二年の暮には井上勝之助大使夫妻も、此の招待には招かれたのであつたが、小村壽太郎大使だけはいつも除外されて遂にこの種の招待はなかつたと云ふことであつた。申す迄もなくこれは『みかど』の音楽について、英國の宮内省が、深く含む所あつたが爲である。

小村さんは任地着任の際の拜謁や謁見の時に、露國皇太后の厭味を問まされたり、李鴻章の奇問に背負投せおひなげを食はせたりしたと云ふことであるが、私が在英當時小村さんの晩酌の相手をした時であつたか、

「自分は明治二十七年、支那代理公使として、始めて支那に渡つたが、その際

時の總理大臣であつた伊藤博文伯から、李鴻章に對して、長々と傳言を頼まれたのであつたが、どうも餘り、先方をつけ上らせるのも不愉快だと思つて、たうとうその傳言は握り潰してしまつた」

と語られ、呵々大笑されたことを覚えて居る。

小村さんは、云はゞ小村魂と云ふのもつて、小村外交を實際に行はれたのである。

小村さんこそ、洵に憂國の經世家であり、亦、大丈夫でもあられたと思ふ。

山本權兵衛大將と袁世凱

この御名代として御渡英遊ばされた、伏見宮貞愛親王殿下には滞りなく御任務を終へさせられ、五月末日英國を御出發に相成つたのであるが、その時の隨員であつた海軍の山本權兵衛大將は、殿下の御出發後もなほ滞在して、日英軍事協定の爲に努力され、ハイドパークホテルに居を占めて活躍してをられた。

或る日のこと、山本大將の副官加藤寛治中佐が私に向つて

「近日、山本大將が英國朝野の名士を招待して、アットホームを催すから暇なら加勢して貰ひたい」

と云はれたので私は、その翌日の正午頃ハイダパークホテルに加藤中佐を訪問した。

處が食事中だと云ふので、食堂へ顔を出して見ると、加藤中佐は山本大將と一所に食事をして居られるので、私は自分が加勢に來た旨を通じ食堂を去らうとすると、山本大將は私を見て、

「どうだ、食事はまだであらう、一緒に食べないか」

と云はれるので、其儘一つ食卓に加はつて食べ始めたが、見ると山本大將等は既に食事のコースの半ば迄済んで居り、私がそこ迄食べ進むのを、凝つと待つて居られる、そこで、私は氣の毒でもあり大急ぎで、食べて居た。

すると、不意に山本大將は、私に向つて

「安保君は、英國にもう何年居たかなア」

と問はれたので、

「もう、一年半になります」

と答へると、山本大將は、優しい口調で

「一年半も居つて、魚と肉のナイフ、フォークの區別が判らぬかなあ」

と、突つ込まれた。成程、私は現に肉のナイフ、フォークで魚を食べて居たのであつた。

「いや、餘り、お待たせしては相濟まぬからと思つて、ツイ急いだけものですから」

と辯解すると

「なに、一寸弱點を衝いて見たゞけさ」

と笑はれて

「自分は、一體何事でも相手の弱點を見ると、一寸衝てみる癖があるが、實際

場合によつては、相手の弱點をぐんと強く衝いて置くと云ふことも必要である」と述べられ、暫く言葉を途切られて居られたが、聽て何か想ひ出された様に「それについて吾輩が一つ、昔話を聞かせよう」

と云つて、食事をしながら山本権兵衛大將はボツ／＼と次の話をしてくれた。

それは明治十九年の暮に、山本大將が、少佐時代に天城の艦長として仁川に回航の際、京城に袁世凱を訪問された時の話である。

こゝで一寸云つて置くが、山本大將は『事前に想を練る』と云ふことに常に努められた方であつた。

私がベルリンへ行つた時、ベルリンには大使館附武官として八代六郎大佐（故大將男爵）が居たが、八代大佐が私に語るには

「山本大將には是れ迄、直接親しく御世話になつたことはないので、その人と成りに就ては誰れ彼れから、いろ／＼と話は聞いては居たが、實の處よく知らなかつた、ところが、今度歐洲を視察に來られ、こちらへ見えて、始めて御人柄を

しみじみ見て、全く敬服した。

その一つの例を挙げると、山本大將は、毎朝、洗面後、誰も居ない室で、靜かに黙想して居られる、いつも、さうである、それは其の日一日のことを、じつ／＼と、よく考へて居られたのである。

今日は誰々と會ふ、誰は如何云ふ性格のものであるし、誰には、こんな話を仕掛けねばならぬ。そして誰には、充分この點を突つ込んで置かねばならぬ。今日行く場所は、彼處と此處である。あの場所では、このことを、この場所では、あの事を、忘れてはならぬ、と、少しの隙もなく、一日中のことに就て想を練りに練りぬかれて居た。従つて何に出會しても少しも驚かない、チャンと準備は出來てをるから、これは毎日のことで、此の八代は、その慎重にして用意周到な態度に、つくづく參つたのである、實に立派な偉い方だ。」

と心から感服して話された。

さて、山本権兵衛大將が自分に語られた昔話に戻るが、八代さんが感心したや

うに想を練る方であつたから、山本大將が、いよく袁世凱を訪問された時も、そも／＼袁世凱は、如何なる人物かと云ふことを、豫めよく研究して行かれたのである。

夫れで山本艦長が事前に色々な人に就て調べて見ると、元來、此の袁世凱と云ふ人物は、軍人が行くと

「私は軍事に關しては特に意見もないが、しかし、政治的に見ると、それは、かうであるあゝである」

と、滔々數千言、大氣焰大議論を吐いて、決して相手に口を開かせない、そうかと思ふと今度はまた、政治家に向つては、逆に

「私は軍人であつて政治に關しては暫く差控えるが、今日は何事も兵力の世の中である。もし、軍事的にこれを見るならば、即ち——」

と、又もや立板に水を流すが如く、相手をまんまと、煙にまいてしまふと云ふ噂であつた。

此の大怪物袁世凱に向つて、山本艦長は常例の想を一段と練つて、さて、いよく會見にと、出掛けられたのである。

應接間に通されて待つてをると、袁世凱が其の戸を開けてヌウと這入つて來て山本艦長と、お互ひに一禮すると、咄嗟に山本艦長は右手を揚げて袁世凱の顔を指し

「貴方のお顔は、ひどく青く血の氣がない、どうか爲されたのではないか、承れば、最近、朝鮮國王から、特に美人を賜られたと云ふことである。さては貴方は日夜其の美人を寵愛せられ、寧ろその愛情に耽溺して、顔色憔悴し斯くも精氣を失はれたのではないか。

貴方は、日清と云はず東亞にとつては今日大切な人物である、東亞を背負つて立たうと云ふ御方である、その貴方が、一婦人の愛に溺れて、心身を害するとは私は潜に天下の爲に惜むものである」

と、眼光炯々相手の顔面を正視しながら、先づ一本、ぐつと突つ込んだのであ

つた。

流石の怪物袁世凱も、此の先手の山本艦長の突きの一手には、思はず度膽を抜かれて

「いや、何、夫れはその」

と、しどろもどろの狼狽振りであつた。が、先方も曲者、すぐ陣容を立直して聽て例の調子で

「私はその問題に就て、一つ政治的に日清兩國の立場から——」

と、山本艦長の持出した問題に對して大に議論を進めて來たのである。すると山本艦長、來たなと微笑して

「政治は自分によく判つて居る。自分も政治の研究家である」

と云ふ前置きで、政治的に、袁世凱以上に滔々と、大議論を吐いて、袁世凱を壓倒した。袁世凱は、そこで、くるりと引つくり返つて

「いや、私は實は軍人育ちであつてこれを軍事上から見ると——」

と來た、待つてましたとばかり、それに對しては山本艦長、お手のものだからウンと馬力をかけて、逆に袁世凱を煙にまいてしまつた。

何しろ、緒戦に於て袁世凱は山本艦長にやられて居るのである、何處迄行つても、どうも勝味がない。

袁世凱は、つくづく

「これは、容易ならぬ人物ぢや」

と、すつかり見直してしまつたのである。山本權兵衛大將の方でも、話をして居る中に

「これは支那人には珍らしい話せる人物である」

と矢張り、人物は人物を見抜く、こゝに、二人は段々話してをる間に、いつか肝膽相照らすに至つたのであつた。

扱てこの會見から幾年かを過ぎて山本大將の大佐時代に、圖らずも例の『朝鮮防戢令』事件が起つた。

これは明治二十二年九月、朝鮮咸鏡道の鹽務司趙秉式は、豊年であるにも拘らず防穀令を發して、同地方産出の米穀を日本へ輸出することを禁じたのである。これは明らかに天津條約に違反して、この爲に、元山に在る日本商人の損失は十餘萬圓に達した。

此の時、我國は仁川に日本で建造した計りの軍艦高雄を派遣した。その艦長が誰れあらう、大佐に進級した計りの新進氣鋭の山本權兵衛其人であつた。

ところが、その當時朝鮮で、ウンと羽振をきかせて居り、朝鮮を屬國扱ひにして居たのが、例の袁世凱であつた、此の袁世凱は、既に山本さんと互に相許して居る仲である。この防穀令事件を圓滿に解決するに付て、袁世凱は、山本さんの爲に、いろ／＼と協力を惜まず、その任務遂行に多大の便宜を計つて呉れた。

因縁と云ふものは誠に妙なものだネーと、食堂に於ける山本大將は、自分の爲に懷舊談であり、教訓である此の面白い話をして呉られたのであつた。

扱て朝鮮に於ける以上の任務を完全に果し得た山本艦長は、直に歸國して内閣

に出頭し委細その経過を報告したが、辯舌滔々理路整然、全く立板に水の概があつた。

驚いたのは、黒田清隆首相や、大隈重信外務大臣よりも、寧ろ山縣有朋内務大臣であり、伊藤博文樞密院議長であつた。

「渺たる一艦長と思ひきや山本權兵衛と云ふ男は大變な人物である！」

と、認められて、後に山縣内閣の時、軍務局長から、次官を経ずして、一躍海軍大臣に任ぜられたのも決して偶然ではないのである。

此の山本大將が、袁世凱との初對面に、その弱點を衝く屈強の資料となつた朝鮮國王から賜つた美人と云ふのは、袁世凱の第五夫人となつて幾人かの子女を設け良妻賢母として評判もよく、袁世凱の死去する迄、終生仕へて居つたと云ふ。

乃木大將のハイカラ姿と喧嘩

今昭和十七年九月、乃木大將夫妻の滿三十年の命日を期として、赤坂區新坂町

の乃木神社と隣り合せの、中の町國民學校が乃木大將の遺徳を慕ひ、乃木國民學校となり、こゝに麴町の東郷國民學校と聖將二人の名を冠した、日本の國民學校は出來たのである。

その學校の一室を乃木室として、乃木大將夫妻の多くの遺品が並べられ、一枚の寫眞にも、ありし日の乃木大將を偲び、その遺徳を仰がせたのであるが、その中に、明治四十四年六月、英帝即位戴冠式に、東伏見宮殿下の隨員として東郷元帥と共に、派遣された時に乃木さんの着用のフロックコートが、或る奇特者から寄贈出品されて衆目をひいたのであつた。

このフロックコートについては私には忘れられぬ印象がある。夫れと云ふのはこのフロックコートは、私はこの乃木室で始めて眼に致したのではなく、今から卅一年前ロンドンに於て、現に乃木さんがその身に着けてをられる所で、御目に掛つた舊知己のフロックコートなので、一段と懷舊の情に打たれたのである。

そも、乃木大將は、よく山本權兵衛伯の家を訪問された方であつたが、こ

の時の隨員に定まると、暇乞かたゞ、渡英前に、山本權兵衛伯を訪ねて

「今度の旅行中の服装は、軍服が宜しからうか、或は平服にしたものであらうか？」

と相談された。

スルト、山本伯は

「それは平服が宜しからう、然し、そんなことは、我輩よりも一緒に行かれる東郷に聞いて見給へ、東郷は、あれで若い時から、なか／＼ハイカラで、服装等のことは、何でも心得て居る筈だ、萬事、東郷と相談してやられ、ば、間違ひはあるまい」

と答へられたのである。

とは知らぬ私は、或る日ロンドンで、ハイドパークホテルに東郷元帥を御尋ねした。すると、丁度その御室の入口で、乃木大將に御目に掛つた。その時の乃木大將はロンドンで、第一等の否な最上飛び切りの服屋である、ポールカマクウキ

ツカーかの何れかで仕立てられた計りの、リユツとしたフロツクコートを召して居られるではないか。實際、平素の乃木さんとは、見違へる程な瀟洒たる風姿をして居られるので、私は乃木大將に向つて

「閣下は、今日は大層立派な御服装で」

と申上げると、乃木大將は笑つて

「いやあ、うちあ何んでも兄貴のやる通りに、やつちよるのぢや、この服もそ
うぢや」

と云つて今一度自分の服装を見返つて居られたが、

「外國では兄貴のまねさへして居れば間違ひがないからの」

「しかし頭髮だけは御免を蒙つてこの通りぢや」

と、いが栗頭を右手で撫で乍ら苦笑されて居た。乃木大將が兄貴、兄貴と云はれるのは、申す迄もなく東郷元帥のことで、いつも兄貴／＼と東郷さんを立てられ、親密の裡に尊敬の意を含んでをられる、聖將と聖將の間柄に毎時も掬すべき

情味の窺はれたのは洵に床しき極みであつた。

乃木大將は、同輩や後進に向つて、毎時も溢るゝ計りの同情と慈愛に満ちてをられるが、その先輩に對しても常に尊敬と柔順を旨とせられ、一生を通じ眞に純情に終始せられたのである。その先輩に對することの現れとしては、ちと話の筋合が副はぬかも知れぬが、嘗てそれは伊藤博文公の長女生子嬢と、末松謙澄子との結婚式の當夜の出來事であつた、その披露の宴席で乃木大將と、伊東巳代治伯とは隣席であつた。

若い時分の伊東巳代治さんは、かなりの粹人で、宴席を早く切り上げて、何處かへ廻りたい下心があつた。それで歸りを急ぎ、他の人に先立つて、女中を秘かに呼んで飯を云ひつけた。そして、まだ皆が酒を飲んで居るのに、茶漬で、さら／＼とやり出したのである。

と見た乃木大將は、苦々しく思つたのであらう。

「おぬしは、早々飯を食つて如何するんぢや」

と、一寸、右腕を上げて軽く伊東已代治氏を突いたのであるが、夫れが伊東氏の左腕に觸れると、はずみでその持つてゐた茶碗を跳ね上げたからたまらない。茶碗は膝の上にひつくり返つて、仙臺平の袴は一面に茶水に濡れて、飯粒は散亂すると云ふ落花狼藉。

若い時分の伊東已代治氏は、色の淺黒い苦味足つた好男子であつたが、見掛けによらぬ腕つ節の強い力自慢の方で

「何するかう！」

と、双方立上つての取組合ひとなり將に大喧嘩にならうと云ふ騒ぎ。

その時である。正面に坐つて居た大御所の山縣有朋元帥が、大聲で

「乃木！」「御ぬしやあ、何んする！」

と大喝された。

すると、乃木大將は一言の返辭もなく、卽座に組打ちの手を解いて靜かに座に卽かれたかと思ふと、いつの間にかこそ／＼と席から姿を消してしまはれた。

之れも美しき乃木大將の性格の一つの現れであらうか。

東條陸相寸鐵の一言

乃木大將のいが栗頭で思ひ出したが、あの日本が國際聯盟脱退の時、我が全權として大見得を切つたのは松岡洋右氏であつた。その聯盟會議の檜舞臺、歴史的場面の寫眞を見ると、確かに松岡全權は、頭髮を伸して奇麗に分けて居られた。その後、松岡氏は、近衛内閣の外相として獨逸、伊太利に使い、露都を訪ふてスターリンの背中を叩かれた際には、終始、いが栗頭で押し通されたのである。その松岡氏が、獨逸、伊太利訪問後、歸國してからの事であつたと思ふが、ある日、内閣の食堂で、各大臣や内閣參議も一緒に食事をした際のことであつた。晝食を採りながらの雑談中に松岡洋右氏は、近衛首相を前にして、頻りに、自分の頭髮のことを物語つて居り

「自分の頭髮は餘りに濃くて、硬くて、分けるには容易ならぬ手數がかゝる。

この硬い毛を分けやうとすると、第一、ブラシの毛の方が參つてしまつて、一寸齒が立たない有様だ」

等と辯じ立て、居られた。と、その時、隣席に居たのが、東條陸軍大臣である（勿論、今の首相である）東條陸相は、不意に

「それには、よいブラシがあるよ」

と、話の中へ嘴を入れられた。

すると、松岡外相も釣りこまれて一寸東條さんの方を向いて

「ほう、さうかね、どんなブラシかね？」

と問ふた。

その時、東條陸相は、にこりともせず、眞顔で

「そりや、馬の毛をこさぐ馬ブラシさ」

と、吐き出すやうに云つた。

一同は、咄嗟、髪の方々してをる松岡サンの頭と、奇麗に光る東條さんの頭を

見較べて、思はず、噴き出しさうになつた。

流石の松岡さんも、馬ブラシの一言には、話の腰を折られてぎやふんと參つた。そこは外交陣營、千軍萬馬の古強者、忽ち話頭を一轉して、御灸か何かの話で頻りと花を咲かせた。

伊藤、山縣、大隈の特色

夫れは明治卅一年の秋で、私はまだ軍艦明石砲術長の大尉の時であつたが、大阪を中心として攝河泉の陸軍特別大演習が舉行されるので、私は横須賀鎮守府參謀の森山慶三郎大尉（後の中將）と一所にその參觀に出懸けて行つた。

何に致せ、その年の十一月八日に第二次山縣内閣は成立した計りで、その十一月中旬の大演習である。桂さんは前大隈内閣から引續いての陸軍大臣だが、海軍の方は山本權兵衛さんが軍務局長から一躍大臣に踊り出して、早速に大演習へ顔出しと云ふ次第であり、寺内正毅さんも中將になり立ての軍裝で、南軍審判長を

勤め、演習現地でよく左り手で答禮されるのを見受けた。

扱て演習が済んでの歸りであるが、私は森山君と兩人で關西鐵道から名古屋に出で、そこで夜半に東京行急行に乗換へた際に、一つの問題が起つたのである。驛のプラットフォームで待つてをると間もなく上り列車が到着した。

早速一等車を探して飛び込んで見ると、乗客が殆んど一杯で座席はやつと一つしか空いてゐない、何れも大演習歸りらしいが、夜中ではあり乗客は皆な居眠りをしてをる、一つの空席には、森山參謀が腰を卸したので、私は尙も車内を見廻はすと此客車は折疊みの肱掛けがずつと並んで、その間に乗客が一人宛腰掛ける式のものであつたが、まん中の處に一人の紳士が、二人分の座席を占領して、弓の様に軀を屈めて寝てをるのが見附かつた。

さあどうしたものだろうと私は考へたが、先づ以て私のその時の心境を御話ししないと筋が通らない。夫れは陸軍特別大演習の後で、山本新海軍大臣は議會も間近かである關係もあつてか、折から神戸沖に在泊中の艦隊に、貴衆兩院議員を

招待して艦内の參觀と午餐の饗應を致された。

その際私と森山君とは、山本大臣からの御指圖で艦隊に參り、艦上で議員の接待や案内に大に斡旋盡力する所あつたが、その當時の代議士達の中には、極めて少數ではあるが、随分と垢抜けのしない豪傑肌の田舎議員があつて、食卓上の作法も何もあつたものではなく、得意の蠻からを振り廻はしたり、政黨を笠に着て酔餘の亂暴を働いたりして、吾々接待の士官等に對しても頗る無禮の動作を示したものである。

吾々はジツと堪へて無事に済んだが、歸り途の關西線の汽車の中でも、一二の代議士が無暗に幅を利かせて、乗客に對し傍若無人の仕打ちが如何にも目に餘るものがあり、愈よ吾々を憤慨させて、今少しで鐵拳を振はんとした位であつた。

そこで今名古屋で急行列車に這入つた譯だが、その餘憤は勃々として若い海軍士官の血潮を湧き立たせてをつたので、客車内の模様が又も代議士連の横暴ではないかと云ふ様な氣がして、一段と聲を勵し二人分の座席の紳士に對し「君、こ

「を一つ空けてくれ玉へ」と不遠慮に揺り起した、するとその紳士は忽ち起き直つて、いとも素直に「ハア、天下の座席です、どうか」と片方の席を空けて呉れた。

案外おとなしく譲つて呉れたので、少々氣の毒な様であつたが、兎も角も夫れに腰を掛けて、扱て落付てあたりを見廻はすと田舎代議士どころではない、之れは又、世間に顔の賣れた連中ばかりで、蜂須賀茂韶侯爵とか、曾我祐準將軍とか渡邊洪基博士とか、岡部長職子爵とか何れも鏘々たる名士揃ひ、はてな之れは少々役者が違つたなと思つて、そつと今叩き起した御隣りの御客を覗いて見ると、夫れは誰れあらう貴族院議長の近衛篤磨公爵其人であつた。貴族院長老連の眞唯中に座を占めた弱年の一大尉、餘り豪然とも出來ないので、潜かに強くもない心臟を鞭撻して態と平然と構へて居ると、聽て近衛公のあつち隣りの高木兼寛男爵が席を立たれ、議長閣下どうぞ、こゝを御使用下さい、私は此の次の静岡驛で下車致しますからと云つて、傍らの荷物の上に腰を移された、近衛さんは夫れは有

難うと一禮されて、再び二人前の座席に蝦の様に巨軀を曲げて横臥された。

之れで、私も一と安心して、うとくと居眠つて夜が明けけるのも知らなかつたが、いつか箱根の山も過ぎて東京驛に着く迄は餘り時間も餘計にはなかつたが、何んにしても口八丁の名士揃ひ、話は夫れから夫れへと花が咲いたが、今でも記憶に残つてをるのは、誰やらが得意氣に今は時めく伊藤、山縣、大隈三大人の噂を一同くさり辯じた事だつた。

扱て遣る様に見えて遣るのが伊藤博文公、遣らない様に見えて遣るのが山縣有朋侯、遣る様に見えて遣らないのが大隈重信伯と云ふ見立てだが？ どうだと嘯ぶく。すると隅の方に居た貴族院議員の一人が「その遣るとか遣らない」とか云ふのは一體何のことかねえ、茶屋遊びのことだろうかと促すと、初めの先生は「まあその邊かね」と笑つて確答は與へなかつた。その内に汽車はいつしか品川を過ぎて車中座談會も大切りとなつてしまつた。

島村大將の情誼

明治四十四年、英國ではジョージ五世の即位戴冠式が行はれた。我國では御參列の爲、御名代、東伏見宮依仁親王殿下を御差遣に相成り、隨員には陸の乃木希典大將、海の東郷平八郎大將と云ふ世界的の名將である大物が出掛けられ、ポーツマス軍港沖のスピットヘッドに於て舉行の即位大觀艦式には第二艦隊司令長官島村速雄中將が、鞍馬、利根を率ゐて參列した、私は中佐でその艦隊の參謀長であつた。

當時の駐英大使は、加藤高明男爵で、大使館附武官には海軍では加藤寛治大佐（後の大將）に代つて井出謙治大佐（後の大將）陸軍では稻垣三郎大佐（後の中將、閑院宮別當）が居た。

滯英中の儀式其他のことは省略するとして扱て、我が第二艦隊は英國を東から西に一周してスコットランドのあちこちの港にも立寄り、最後にブレマウス軍港

を訪問したが、其處で一才島村さんの人情味豊かな面白い場面が現はれた。

夫れは島村さんがかつて海軍兵學校生徒の時分、確か明治十一、二年頃、お雇教師として校舎に教鞭を執つた英國のウイラン海軍中佐が、今は引退して、この軍港に住つて居る由を聞かれて、その住所番地を鎮守府司令長官ボーモント大將の晩餐に招かれた際、長官夫人に確められ、翌日、艦隊出港前に、市外のウード公園にあるウイラン中佐宅を訪問された。

私も、お伴したのであつたが、老中佐は、大喜びで、それからそれへと話し込んで、歡談に時の移るを知らなかつた。が、やがて時刻が來たので、島村さんは暇をつけて歸られる際に、隣室を見ると卓上に白布を敷き、その上には立派な盛花もあり、結構なお菓子や、サンドウキッチや果物などが、いとも美事に準備してあつた。

恐らく島村さんの來訪の爲に、準備されたとは思つたが、そのまゝ馬車を驅つて歸艦されたのであつた。

さうすると、その直後に、ウイラン中佐の使が、息をさらして、喘ぎ乍らやつて来て、老中佐の走り書の書翰を差出したのを、島村さんが手にとつて開いて見ると……。

今日の御來訪は天にも昇る喜びで、鎮守府から豫報があつたので、せめて心ばかりの歡待を致さうと、老妻が、あれこれと、食事の用意をして、お待ちして居つたのに、さて、お會びして見ると、餘りの嬉しさに、たゞ、もう話込んでしまつて、時の移るのを忘れ、しかも、老妻の心を込めて用意した折角の饗應迄も忘れて、お歸ししてしまつて、今更面目なく、老妻からは大いに叱られ、散々の態である、何卒御寛恕を祈る、との意味であつて、老中佐が、手をあげて、その頭を押へて嘆聲を洩してゐる眞摯の様子が眼に見えるやうであつた。

島村さんは

「我輩も、さうとは思つたよ。でも、それで我輩は大満足さ」と笑はれたのであつた。

島村長官の決断と研究心

島村司令長官の率ゆる遣英の第二艦隊は、英國のブレマウス軍港を辭してから、對岸の佛國を訪問したのであつて、先づ北岸の商港ハアーブルに入港した。

このハアーブルの港は、入口が浅いので吃水の深い大きな軍艦は入らない。佛國では我名譽ある鞍馬、利根の様な大艦が入港すると云ふので、非常な厚意を以て港の入口や内港の浅い所を浚つて泥を堀つてくれたのであるが、兎に角その内港へは、一番潮の満ちた時でなければ、矢張り艦底が觸れて入ることが出来ないのである。

扱て入港當日の満潮時は夜明けズウツと前であり、まだ暗かつた。その夜明け前と云ふ處に一つの問題があつた。

凡そ、外國の港に入る際には儀禮として、その國に對し二十一發の禮砲を放つのが常規であつて、之に對して、先方でも二十一發の答砲を放つのである。しか

も、此の禮砲は軍艦旗の揚つて居る間に打つのが常例であるし、ハーブルの内港へ這入れば建物や人家もあるので、大砲は打てないのである。随つて禮砲を放つとすれば軍艦旗を未だ揚げない夜明け前に施行するか、或は全然禮砲を見合せ外ないのである。

そこで、私は、島村長官に

「禮砲を打ちませう？」

と伺ふと、島村長官は、即座に

「暗くても構はぬ、禮砲を放つのだ」

と、斷乎として云はれるので、私は其旨鞍馬艦長に傳へて、暗闇の中で、堂々と二十一發の禮砲を放つたのであつた。

すると、どうだらう、佛國側は、それを待構へて居たと見え、一分の間もなく直に暗の中からどかん、どかんと二十一發の答砲を放つた。

これは何でもないやうなことはあるが、國際間の儀禮は一寸したことが、却

々面倒なもので、折角先方で答砲の用意迄整へて居るのに、暗いとか、時間外だとか云つて禮砲を見合せて、その港に入港したとしたら、洵に妙な具合ひで、夫れこそ何んだか割り切れない場面が発生するのである。

島村さんが機に臨んで突嗟に事を判斷して一氣に裁斷せられる、その風格は全く後進の學ぶべき所で、島村長官は實に傑れた人であつた。夫れからハーブルへ入港した後、島村長官は巴里に行かれて大統領に謁見したり、外交舞臺で有名なデルカッセルが丁度海軍大臣をしてをつたので、之れと會談會食を重ねたり、日本に聘せられて軍艦松島、嚴島、橋立を計畫したベルタン老博士なども交歡せられたが、一日巴里郊外にあるビュック飛行場を視察された。

此處は、モリス・ファルマンが自分の考案計畫の飛行機を作つて、自分で操縦して性能を試験したりしてゐる飛行場であつた。

すると、先方では我艦隊將士を迎へ、特に、島村長官が見えたとモリス・ファルマン氏が出て來て一と通りの説明を済した後

「如何です、乗つて御覧なさいませぬか？」
と進めたので、島村さんは、直ちに

「うん、乗せて頂かう」

と、無難作に乗られて、それを、モリス・ファルマン氏が操縦して空中高く舞ひ上つた。

すると、この事が忽ち巴里の新聞で仰々しく傳へられ、日本の島村司令長官が飛行機に乗られた寫眞が、でかくと掲載された、その筈である。明治四十四年頃と云へば、飛行機は墜ちるもの、危いものとされて居たのである。従つて、佛國の陸海軍人でも、餘り飛行機には乗つて居らぬ、ましてや將軍で飛行機に乗つた者は、まだ一人も無かつたと云はれる。

我國でも明治四十三年十二月、佛國から購入したモリス・ファルマン飛行機を徳川好敏大尉（今の中將）が代々木練兵場でテスト飛行をなし、四〇米の高さで、約四分間程、距離三千米を快翔したのが、始めての空中飛行であつた。

それから大正二年春三月、所澤から今の明治神宮外苑迄（當時の青山練兵場）遠距離飛行をやると云ふので、東京中は大評判であつたが、これが、途中で故障を起し、墜落したので、折角、期待した大東京市民を非常に失望させたことを記憶する。

かう云ふ時代に、徳川大尉の始めて乗つたと云ふ飛行機もモリス・ファルマン機であり、因縁殊に深い、そのモリス・ファルマン氏自身が操縦する飛行機に、島村長官が搭乗したのであるから面白いではないか。巴里の新聞が、やんやと騒ぎ立てたのも無理からぬ次第である。

巴里の新聞の論説を拾つて見ると

「實に天晴れである、流石に武勇傑れた日本艦隊の將士達である。殊に司令長官の島村中將が、ビュック飛行場で、飛行機乗りの先鞭をつけたのは秀逸である、然るに何ぞや佛國の將軍連は、一人でも今迄に飛行機に乗つてみたことがあるか、國防上からしてまことに慨かましい話ではないか」

と、島村長官を賞讃する一方、自國の將官を、猛烈に攻撃した。

今日から見れば何でもないことであるが、當時、この國の將官は危ぶんで、乗らなかつた飛行機に、敢然と搭乗した島村さんの意氣は正に、佛國人の膽を奪ふものがあつた。

元來、島村さんは、何事に對しても極めて熱心な、研究心の厚い方であつた。殊に武器に對しての熱意は非常なものがあつた、この癖が、自づから發揮されたのであるが、しかし、老將軍島村閣下の、燃えるやうな愛國心と意氣込が、此の話によつて、窺ふに足るものがあると思ふ。

泥の白服で伊帝と問答

さて、此の遣英艦隊は、歸途地中海に這入つてから、佛國のツローン軍港に立寄り、次で伊太利のゼノアに入港し、伊太利皇帝に拜謁することになつた。

當時、伊太利の皇帝は御避暑中で、外國人には拜謁を許されない例であつたが

我が艦隊司令長官一行には特に御沙汰があつて、皇帝の御避暑地の行在所に於て拜謁を差許されることになつたのである。

伊太利皇帝の御避暑の場所は非常に山奥で、アルプス山麓のラコニジ村にある山の離宮から、更に、五十哩（八〇キロ）も山奥で、標高九七五米のセント・アンナ・ヂ・バルヂェルと云ふ寒村にある御獵場で、山羊の御狩獵中であつたが、そこへ特に御召しになつた譯であつた。

一行は島村長官と鞍馬、利根の兩艦長と、參謀長の私と、夫れに案内役として伊太利大使館附武官齋藤半六中佐と都合五人で、豫めチューリン市（トリノ市）迄汽車で出張して居り、そのチューリン市の旅館から自動車で、伊太利皇帝の御避暑地へと向つたのである。

夫れは八月十八日のことで、随分と暑い日であつた。一行は、海軍の白い軍服を着して、拜謁用の正装は、それ／＼荷物にして、車内に載せ早朝出發して行程正に三〇〇キロと云ふ田舎道を、全速力で突破し、山奥の行在所である御狩獵場

に着いたのが、午前十一時過ぎであつた。そのバルヂェル村の、小さな田舎ホテ
ルに車を駐め途中の埃と泥にまみれて眞黒になつた、島村長官と兩艦長とは、先
づ身體を拭き、塵泥を洗ひ落して正装に着換へる準備に取掛り、私と齋藤中佐と
は、汗と塵泥で汚れた儘の眞つ黒な姿で、取り敢へず拜謁の時間を打合せ爲、
行在所に參上したのである。

行在所に着いて、私は、その御玄關で、宮内大臣か侍從武官長に、お眼にかゝ
りたいと申出た。

するとその御玄關へ、つか／＼と出て來た人がある。大きなボックスの舊式寫
眞機を肩から掛けて、粗末な背廣服を着た、背の低い、四十餘りの人で一寸小使
長位の格好と見えただので、私は再び

「宮内大臣か侍從武官長に」

と、その人へ話し掛けた途端に、齋藤武官が、横合から、急に

「安保君、その方は陛下だぜッ」

と、注意されたので、私は一寸驚いたが、兎に角、皇帝に對し

「只今、島村長官以下、この地に到着致した處であります、何時頃、拜謁を
お願いいたしましたら？」

と、英語で御伺ひすると

「時間は何時でも、今直ぐでも宜しい」と矢張り英語で仰せられるので、私は
「夫れでは之れから正装に着換へ中ですから、服裝を整へ次第參内致す様申傳へ
ましょう」と申上げると、皇帝は「なに、正装には及ばない、服は略服のまゝで
宜しいから島村長官に、さう傳へるが宜しい」

との御談であつた。そこで、私はその旨申傳へるべく、皇帝の御前を辭さうと
すると、皇帝は、齋藤武官に向つて

「島村長官に傳へに行くのは貴方一人で宜しいだろう、此の安保參謀長は、俺
が、とりこにして、此處に止めて置くから長官にさう傳へてくれ給へ」

と、皇帝は微笑して仰つしやるのである。齋藤武官は直ちに、島村長官を迎へ

に田舎ホテルへ向つた。

私は、長途の全速力の自動車疾走で、汗と埃で、白い軍服は全く鼠色になり、ドコモこども、汗と埃で汚れて顔などは、印度邊の土人の様な相貌を呈してをり餘りにも禮を失すると思ひ、幾度びかホテルに歸つての更衣を御願ひしたが、皇帝は一向に御聽入れがない。こちらは大に恐縮して居るが、皇帝は、至極御氣輕に、いろ／＼と、私に向つて質問を試みられるのである。

その御質問の重要な點は

一、今、日本では英國で巡洋戦艦金剛を建造中であるが、其の主砲は、どんなものか

一、貴下は男爵だが、その爵は親譲りか、又日本ではどう云ふ功績によつてどの程度の爵位を與へられるのか、文武官によつて、授爵はどう違ふか、有爵者に對してはどんな待遇を與へるか？

と云ふ様なことであつた。

こゝで、其の金剛の主砲のことに觸れなければならぬ……。

金剛の主砲は實は十四インチであつたが、世間に未だ公然と發表しては居なかつた。世界には、十二インチ（乙號）と發表してあつた。

金剛は、明治四十三年十一月、英國ウィッカース會社に建造を注文したもので日本は世界に先んじて、十四インチの大砲を主砲に採用したのであるが、それは、いろ／＼経緯があり、會議に會議を重ね、實驗に實驗を重ねた上に、明治四十四年四、五月頃に採用を決定した譯で、當時、金剛の建造は世界列強海軍注視の的であつた。

因みに金剛の起工は四十四年一月、進水は四十五年五月、而して其の竣工は大正二年七月で、丁度その時は私は英國大使館付武官として、金剛をウィッカース造船會社の手から受領する立場に立つたのである。

米國でも、此の金剛建造あつての後に、その戦艦ニューヨーク、テキサス二艦に十四インチ砲を始めて裝備したやうな次第である。

だから、伊太利皇帝に拜謁した時は、十四インチ砲採用決定後三四ヶ月しか経つてゐないのに、その発表前の大砲のことを訊されたのであつた。

これが參謀長を『とりこにして止めて置くから』の原因であつたのである。然し、如何に、伊太利皇帝が、海軍勢力と云ふ問題や、授爵に就いて、細心の注意を拂つて居られるか、充分に解る次第である。

さて、このやうにお玄關の横手のお庭のところ、皇帝と種々談話を申上げて居た時に、奥の方から、矢張、寫眞機を持つた、質素な服装の、中年の婦人が出て來られた。すると、皇帝は、私に對し

「これは自分の妻だ」(イントロデュース・マイ・ワイフ)

と紹介された。如何にも平民的に妻だと仰つしやつたのには尠すくなくからず驚いたがその皇后陛下も、私に對して寫眞を撮影するから、あつち向け、こつち向け、と仰せられる。

前にも云つたやうに、白服は鼠色、顔でも髪でも、泥だらけなので

「どうも、困ります」

と申上げたが、そんなことにお構ひなく、パチ、パチと撮影されたのには、全く閉口し恐縮した。

その中に、島村司令長官や鞍馬、利根兩艦長が、正装して全勳章を輝かせ、颯爽としてそこに現はれて、伊太利兩陛下に拜謁し、私丈は汚れた儘の白服で、その列に加はつたのであつた。

晝食は、お庭の天幕の中に、食卓が用意され、御陪食を仰せつかつた。食膳には、此の日午前に、皇后陛下御自身が、附近の川で釣られたシルバー・トラウト(姫鱒)のフライを御馳走になつたりした、なか／＼善美だが極めて打解けた御陪食で、宮内大臣、侍從武官長、主獵頭と、こちら五人だけの、まことに親密な床しいものであつた。

食卓では私は皇帝の左隣りに座席を賜はつたが、食事中色々の御話の中に

「島村長官には伊太利のサンモリス一等(旭日)鞍馬、利根兩艦長には同章

三等、安保參謀長には王冠三等（瑞寶）の勳章を贈る筈だが、それで異存はないだらうね」

などと、御自身で私に丈解かる程度の低聲で、御言葉があつたのにも、恐縮した。想へば三十一年も前のことである。

シドニーで氣を吐いた山下源太郎將軍

本年五月三十一日夜、特殊潜航艇を以て、濠洲シドニー軍港を強襲し、港内突入に成功、敵戦艦一隻を撃沈、三艘未だ歸還せずとの大本營發表があつた。

彼の珊瑚海々戦に傷いた米國の最新鋭の戦艦ノース・カロライナであるか、どうか分らぬが、まことに一大成功であり、その偉勳は燦として世界戦史に輝き國民として大慶に堪へないところである。

處が、十月九日にはこの特別攻撃隊の内、二隻の四勇士の英靈が日英交換船鎌倉丸で横濱着、祖國に無言の凱旋をしたのは全く夢の様で、今更ながら感激の涙

新たなるものがある。

行くがさいご、生還は絶対に期する處でない、心に念ずる所は天然の地形に圍まれた狹隘なる港口をくゞり抜け、幾重ともなく張られた、嚴重の防禦線を突破して、灣内深く侵入、目指す敵戦艦を探り當て、止めを刺すに在つた。而して見事之を撃沈し、その目的を達成し、自己は其儘海底に護國の人柱となつた。

その滅私奉公の精神、盡忠無比の闘魂こそ、我が海軍魂の精華であり、武士道の極致であつて、その餘りにも尊き、神の如き行爲に打たれて、敵すらも深い感銘を受け、シドニー要港司令官のグールド海軍少將の如きは、一部の輿論の反對を押切つて政府を動かし、この英靈に對し鄭重なる海軍葬を執行し、更にラヂオを通じて「鋼鐵の柩に乗つて、のり込んで來たこの勇士の忠烈を思つても見よ、そして、せめてその千分の一でも國の爲に盡す所あれ、濠洲の諸君！」と放送し自國民の奮起を促した程であつた。

私はこのシドニーには五十餘年前に行つたことがあり、その形勝を占めた袋の

口の様な、港口の地形や犬牙の如く陸と水とが互に相出入交又してをる、港内の
 状勢を親しく視察してをり、今尙ほ記憶に新たなる様な氣がするので、この特別
 攻撃隊のシドニー港、死の強襲には一段と感銘深きものあるを覺ゆるのである。
 而して更に、その當時の忘れ難い貴重なる想ひ出がある。

それは、明治二十四年十一月のことであつたが、私は少尉候補生として、練習
 艦比叡に乘組み、遠洋航海をして此のシドニーに入港した時のことである。

元來、シドニーは世界三大良港の一つと呼ばれた立派な港で、一部分は濠洲の
 軍港であつて、英國の艦隊の常泊地となつてをり、丁度此の時も英國艦隊司令官
 の旗艦オランダが在泊して居つた。

一體、多數の軍艦が、同じ港に一所に在泊した場合には、日常の行事で外観に
 現はれる事は總て先任の艦に倣つて行ふことになつてをるのである。殊に軍艦旗
 の掲げ下げの如きは然りてあつて、外國の港に在つては、その國の先任の艦に倣
 ふことが儀禮上の慣例になつて居るのである。

このシドニーに於ても、我が比叡は慣例通り、英國の旗艦オランダに倣つて毎
 日の行事をやつて居つたのであるが、或日のこと私は當直候補生として、當直將
 校である砲術長の山下源太郎大尉（後の大將、男爵）の下に勤務をして居ると、
 恰も軍艦旗を下げる時刻となつた。斯様な場合には、その時機の五分前に必ず先
 任の艦の檣頭に整合旗が掲揚せられ、その旗の下りるのを合圖に各艦は皆、之に
 倣つて一齊に軍艦旗を下ろすのである。

それで私は旗艦オランダの整合旗の下りるのを、今か／＼と注意して居ると、
 山下大尉は出し拔けに

「當直候補生、軍艦旗を下ろせ！」

と命令された。私は變に思つて

「旗艦の整合旗はまだ下りませぬが？」

と云ひ返すと、山下大尉は、聲を勵まして

「いや、かまはぬから下ろせ」

と駁命された。その當時は軍艦旗を下ろす時には、小銃の空砲を打つことになつてをつた。それで私は即座に

「打て、下ろせ」

と號令を掛けると、小銃空砲はボンと響き、君が代のラッパは唸唸と鳴り渡つて、軍艦旗は全艦最敬禮の中に、静々と下ろされた。

すると後甲板に居られた森又七郎艦長は、驚いて艦橋の方にとんで来て

「當直將校は誰だ、英國の旗艦は、まだ旗を下ろさんぢやないか、どうしたんだ？」

と威猛け高になつて怒鳴り付けた。山下大尉は肅然として襟を正し

「艦長！旗艦に倣ふことは、よく承知致して居ります！しかし、軍艦旗の掲げ下げは元來自國獨自のものであります、先任の艦に倣ふのは、單なる儀禮に過ぎません。それで、候補生の教育の爲に、一度だけ、此の儀禮を無視して、軍艦旗の取扱ひの眞の意味を徹底させたいと思ひ、獨自の行事として下ろしたのです」

と答へられた。これには艦長も一言もなかつた。

その當時は、今日と異り、英國の軍艦旗は威風堂々として世界の海洋を壓するの概があり、しかも、その英國の軍港に在泊した我が貧弱な木艦比叡が、儀禮を無視して、眞つ先に軍艦旗を下ろしたのであるから、在港の艦船は一驚を喫したに相違ない。

斯様な環境にあつて、敢然獨自の行動を執つて、實例を示された山下大尉の行爲は、獨り少尉候補生のみならず、艦内全員の生きた教訓として、軍艦旗の尊嚴を徹底せしめるに役立つたのであつて、私の終世忘る能はざる處である。

蓋し山下さんは正義の人であつて、子弟に訓話せられる時でも、決してゑらい人になれとは教へず、正しい人になれと戒められるのであつた。

正を採つて怖れずと云ふのが、山下さんの眞骨頂であつて、當時世界に君臨すると迄唄はれた、大英國の國旗を向ふに廻はして、びくともせず、敢然として日本軍艦旗の氣を吐いたのも、この正を採つて怖れずであつた。

ノックス國務卿の來朝

そもく、アメリカが東洋制覇の野望を持つに至つたのは、一八九八年即ち明治三十一年に、ヒリッピン群島を領有するやうになつたに始まる。

即ち米國は、百年近くも、モンロー主義の傳統を固持して、西半球に踞踏して來たが、對外硬の積極主義の政治家や軍人が勢力を得て、こゝに平和主義の假面を脱し、太平洋を我物として、活動するやうに蟬脱して、本體を露出したのであつた。

當時、海軍次官であつたセオドル・ルーズベルト、これは勿論後の大統領であるが、それに上院議員のロツヂ、戰略家のマハン海軍大佐等が、その首腦者であつた。果せる哉、比島領有の翌年、即ち明治三十二年九月には、所謂ジョン・ヘイ國務卿の門戸開放、機會均等の旗印をひつさげて、支那干渉の端を開いたのである。

日露戦争直後、かのハリマンが、桂首相に迫つて、承諾を得た南滿洲鐵道株式會社の共同經營案は、小村外相の炯眼によつて、忽ち、此の假契約を破棄し、國家の危機を未前に防ぎ得たのであるが、これは、もとく米國政府の背景があつた譯ではなく、一米國市民の雄大な企業計畫と云ふ建前であつたのである。

その後タフト大統領の下に、ノックス國務卿の提案した滿洲鐵道中立計畫は、堂々米國政府の名を以て、公式に行はれたものであつて、その内容は、支那政府に資金を貸與して、日露兩國が現に滿洲に於て所有する鐵道を買戻さしめ、表面上は支那政府の鐵道とし、實際上には買戻し資金を提供した列強の、共同管理下に置かうと云ふのであつた。

つまり、支那をだしに使つて、日本の折角の繩張りには、縁もゆかりもない米國が、横合から飛入りして不法にも日本の利権の仲間入りを仕様と云ふ、随分虫のいい話で、人を愚にするにも程があり、全く日本を踏みつけにした言語道斷の提案をしたのであつたが、日本が斷乎として、即座に此のノックスの提議を拒絶し

たのはもとより當然な話である。

露國も英國も此の提議には、全く反対で、米國の提案は丸潰れとなり、たうと
う米國の大失敗となつた。

當時、此の失敗の前後策に關して、タフト大統領は兄貴分である前大統領のセ
オドル・ルーズベルトに意見を求めたところ、ルーズベルトは、明治四十三年十
二月にタフトへ返事を送つた。

その一節には、かう書いてある。

「米國にとつて最も大なる利益は、米國から日本人を追ひ出すと同時に、日本
の好意を失はないことである、然るに、日本にとつて死活的利益は滿洲と朝鮮と
である、故に米國としては理由の有無に關らず、滿洲に關し、日本の利益に反し
若くは、日本に脅威を感じしめるが如き措置は、絶対に、これを執らない方が、
米國にとつて特に有利である。余は恫喝政策は、國家乃至國際間に對しては用ふ
べきでないと思ふものであつて

『射撃する意志なきに引鐵を引くべからず』

との格言を破つてはならぬ。要するに、戦争を敢てする覺悟なくして滿洲問題
に關し日本を恫喝する如き態度は最も戒しむべきである。云々」

日本人を追出すが、日本人を怒らさないやうに等と、随分と人を喰つた横着な
言ひ草を吐いては居るが、流石にセオドル・ルーズベルトは役者が一枚上手であ
つた。

とにかく、彼は對東洋政策に關し一隻眼を有し、その邊の真相をよく掴んで居
る。ところが歴代の大統領乃至國務卿は、この賢明な忠言を守らず、殊にスチム
ソン一派の主張する架空的夢想論は米國の朝野を風靡し、一途に恫喝により日本
を屈服せしめ得ると誤診し、遂に米國自身にとつて全然無意義な、しかも真正の
戦争目的を有しない帝國主義的戦争を敢てするに到つたのも、云はゞ、思ひ上つ
た天罰であり、その酬ひである。

處がその滿洲鐵道中立問題の元兇であるノックス國務卿（現時の挑戰的惡まれ

口のノックス海軍卿とは別人)が、明治四十五年の 明治大帝の御大葬の際、米國全國民を代表してと銘打つて、使節として來朝したのである。

憎さは憎し、この機會に、お面の一本も食はしてやりたいのが山々だが、そこは日本人である。禮儀は何處迄も厚くして、大國の使節として充分待遇してやるだけの襟度はあつた。

吉松司令長官の獨斷專行

この 明治天皇の御大葬には、世界各國から皇帝の御名代の皇族方や、國民代表の使節等が御差遣になつて、續々來朝せられるので、横濱に於ける右の迎送の儀禮や警備を必要とする所から、當時勃海灣方面警備中であつた、吉松茂太郎中將(故大將)の率ゐる第二艦隊(當時私は大佐でその參謀長であつた)を横濱に招致せられた。

この際の横濱に於ける外國使節に對する儀禮に就いては、關係官省、即ち、外

務省、海軍省、宮内省とも打合せ、その規定せられた處に依つたのであるが、その迎送の儀禮は皇族と臣下とは劃然たる區別がついて居り、夫れがバルカン邊りの小國の皇族と云へども、その御使節に對しては、第一御上陸の棧橋からして臣下とは違ひ、その棧橋から、御召列車迄の間には緋の絨毯を敷き詰め、全く土を踏まずに行かれる様になつてをり、正裝の儀仗隊がその道筋に整列する。汽車も特別の宮廷列車であつて、東京に到着されると、殿下方の御出迎もあり、總理大臣始め各省大臣高等官も出迎へるし、御宿泊所も、陸軍からの警備隊が御守りするのである。

一方臣下の方は如何に大國であつても、その使節や國民代表に對しては、先づ上陸の棧橋が皇族方とは違つて手摺には布も巻てないし、列車迄の道にも絨毯は敷かず、砂利の上を歩かれるのであり、僅に警戒の衛兵が處々に立つ計りで、汽車も普通の一等車である。勿論、東京驛でも出迎へは次官以下の少數で、旅館の護衛も若干の警官が當ると云ふ、洵に格段の相違である。

横濱では各國の大使を始め館員や、夫れ／＼居留民も多數出迎へて、親しく上陸場の棧橋や、列車邊りの儀禮の實狀を眼の當り視て居るので、兩者の間に公式の取扱ひ振りや、儀禮上の待遇が餘りに違ふのは、國交上から見て如何かと思はるゝ節があり、その接待役に當られた方々も、内々心苦しく思はれて餘程困つてをられた。

そこへ、米國全國民の代表として例の有名なノックス國務卿が、軍艦メリーランドに搭乗して堂々と、横濱に入港し來つたのである。

勿論、皇族でないから儀禮待遇は、臣下並で上陸棧橋も違へば、絨毯も儀仗隊もなす。

一面から考えるとこの國際平和を旨とする時代に、しかも御大葬に際して夫れ／＼自國を代表して參列する貴賓に對し、餘り目に見える様な差別待遇を示すことは徒らに先方を刺戟し、國交上の相剋を惹起する恐れなしとしないので、頗る面白くない。そこで横濱に於ける海上及上陸場の警備を受持つて居られる吉松司

令長官は、機宜の所置として、海上では長官自身が長官艇で、ノックス卿の乗艇と同行して、自から警護する様な形を採り、又上陸にあつては、皇族に對する儀仗隊の代りに、外賓を警護する意味の衛兵隊一大隊を編成し、通常禮装を着せて整列させ、棧橋から列車迄ノックス卿を送つたのである。

これ等の行事打合せの爲め吉松司令長官は、米艦メリーランドが入港すると直に森田大尉參謀を同艦へ遣はされた處、參謀は先方に行つて先づセクレタリー即ち秘書官に會ひたいと申込み、早速出て來た男と上甲板に立つた儘色々上陸の打合せなどして居ると、それはノックス卿自身であつたことが判つて、兩方一寸驚ひた様な喜劇もあつた。

蓋し當方で秘書即ちセクレタリーと申入れたのをセクレタリー、オブ、ステート即ち國務卿と間違へて、ノックス自身がノコ／＼出て來て大尉參謀と立ち話をさせられたのである。

とに角に、吉松司令長官は自己の權限内で、而かも規定の儀禮方式や制令の範

園内で工合よく先方の顔を立て、やつたので、米國の大使館や、使節一行や居留民も、その儀禮や待遇に大體満足して居つたと云ふので、當時この米國使節の接待役であつた、八代大將と栗野子爵は大に喜ばれて、吉松長官の所置に衷心から感謝の意を表され

「實は在留米國人等の感情も無視することは出来ないので、内々心配して居つたが、御蔭で自分達の顔も立つたよ」

と、大満足であつた。海軍省でも、この時の所置は、

「よくやつてくれた」

と、大に喜んで居られた。

兎角世の中は規則づくめで、之に拘泥し之を固守して、何んでも化石的に事を扱ふのが、通弊で甚だ面白くないが、この規則を生かして扱ふと云ふ處に、實は大なる思慮が切要である。

現下の大東亞戰に於ける、銃後の食料配給其他色々の問題に付ても、規則や法

令の化石扱ひは、一億一心國家に御奉公の主旨から云つても、特に留意を要すると思ふ。

一體吉松司令長官は、極めて沈着寡言、滅多に口を開かぬ人だが、識量があつて膽の据つた人物であつた。

第二艦隊で勃海灣警備中かう云ふことがあつた。

それは明治四十五年の春未だ淺く山には雪も残つてをる頃であつた。北京で袁世凱の變があつた際、吉松司令長官は幕僚と共に、旅順鎮守府長官山田彦八中將の晚餐會に招かれその官邸で食事最中であつたが、關東都督參謀長の星野少將が、突如官邸を訪れて、

「北京の變に關聯して、大連の柳樹屯にある一個聯隊を天津に急派したいのだが、陸路營口などを迂回しての鐵道では長時間を要するし、何とか鎮守府の方で輸送船の都合は願へないだらうか」と申込があつた。

鎮守府には勿論、夫れに應ずる様な船はなし、一座互に顔を見合はせてをつた

が、默然として聞いて居られた吉松長官は、

「よし！ どうしても繰り合せがつかないなら我第二艦隊で護送しよう」と議は忽ち一決した。

即座に吉松長官の命令は鎮守府から、黄金山の信號所を通じて第二艦隊に傳へられ、至急出航の準備は整へられ、翌朝迄に陸軍を乗艦せしめて、その日の中に第二艦隊を以て秦皇島に送り、私は直に武装従兵一名を連れて汽車で北京に乗りこみ、伊集院彦吉公使や陸海軍武官などと打合せを了し、一方海上では軍艦を太古と芝罘に配するなど、全く機宜の處置を誤らしめなかつた。

元々軍艦で陸兵を輸送することは當然海軍大臣の認可を必要とするのである。それを認可の暇なく無断で、吉松長官が獨断専行されたのであるから、海軍省でも随分驚いたと云ふことで、これはノックスの参列の際の處置とは違つて、後から、海軍大臣の叱りを被つたが、吉松さんは「戦機を失してはネ」と唯だ苦笑して居られるのみであつて、實は之れは大出来であつたのだ。

英國の大宰相

老翁チャーチルと對談

チャーチル首相の母に就ては前に述べたが、その父のランドルフ・チャーチルは、矢張り政治家で保守黨に屬し、サルズベリー卿の再度の組閣の時に、餘りにもウルサ型であつたので、口ふさぎに拾はれて大臣となつたと云ふ評判もので、この父と、あの母の遺傳かどうか知らぬが、今のウインストン・チャーチルは、口八丁、手八丁の強したかものであり、青年將校として、今問題の印度にも駐在の經歷を持ち、ボア戦争の時は、南アフリカに於ける通信記者として活動したこともあり、海軍の事は二度も戦時の海軍大臣を勤めたと云ふ比類なき海軍通である。

演説は又、妙を極めて、人を魅する力があり、それで、文章は、何人かの文豪中にも數へられる程の文才を發揮し、晝は年一回開かれるアカデミー展覽會にも